
孤児院のナテア

亜矢

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

孤児院のナテア

【Nコード】

N6428S

【作者名】

亜矢

【あらすじ】

丘の上にある孤児院に住むナテア。裕福とは言えないけれど、毎日楽しく過ごしていた。しかしある日を境にその生活が変わっていく……。そんなナテアの幼馴染は国に仕える騎士と美形な王子さま。3人は数年ぶりに再会するが、もう小さな子供ではなくて ほんの（ たぶん ）異世界ファンタジー。

始まりの始まり

ナテアは小さな足を一生懸命動かして走っていた。しかし一生懸命とはいっても幼子の足なので高が^{たか}知れる。少しでも早く走れるようにと、ナテアの手は大人に引かれていた。周りはそんなナテア達2人を囲むように 何かから守るように走っていた。

「大丈夫ですか、ナティアーナ様？」

ナテアの周囲にいる者たちは時折気遣うように声をかける。本当はもう走れない、と言いたいナテアだったがそれどころではないと分かっているため首だけで頷く。ナテアは「はあはあ」と息を乱しながらも文句のひと言も言わない。ナテアの手を引いている男はなにを感じているのか、握っている手をぎゅっと強く握り直した。

時間帯は昼回り。ナテアはただひたすら走った。理由ははっきりとは分らない、いや、信じたくない。……分かるのは危険が迫っている、ということだ。

つい先ほどまで花を摘んだりしていたナテアは小綺麗なワンピース姿。怪我の痕1つなかった白い脚には木の枝や葉っぱなどでたくさん^{さん}の切り傷ができていた。ただでさえ根っこや岩で走りにくい森の中にいるのだ、切り傷以外にも打撲の跡もできていた。

普段ならナテアが怪我をしたときにはどんな傷であろうとすぐに治療される。だが今はそれどころではない。……そのことは幼いナテアでさえも周りにいる者たちの様子で分かった。

ここら辺りで大丈夫だろう、と先頭を進んでいた1人が立ち止ま

った。それに次いで他の者も立ち止まる。周囲を警戒するように皆ナテアを中心に集まってきた。

ナテアの手を握っていた者は手を離すと、目線を合わせるようにしゃがみこんだ。申し訳ございません、と言いながら傷の付いたナテアの脚に手をかざし治療していった。

「ねえ、何があつたの？ 父さま、たちは？」

息を整えながら一体何があつたのか、とナテアは説明を求めた。しかし大人たちはナテアの視線から目を逸らすように俯き、黙る。

「嘘だよな？ 父さまたちが、死んだって……」

走り出す前に1度だけ聞かされた言葉。 父と母の死。ここ

にいるも者たちをナテアのところまで連れてきた兄は1言だけそう告げると元来た方へと戻っていった。

言われた言葉に初めは冗談だと思った。慌てふためく、または怒ったナテアを見ようとしたのだと。

しかし兄が両親の死を告げるのと同時に渡された指輪を見て、事実なのだと気づかされた。

それでも嘘だと信じたかった。みんなを巻き込んでのいたずらだと。

ナテアは大人たちを下から覗き込むように見上げ、反応を見る。するとナテアの目線に合わせるようにしゃがみこんでいた男が小さく言葉を発した 申し訳ありません、と。

お逃げください、ナテアを囲んでいる大人たちの誰かがそう言葉を発した。そして多くは語らないが、皆ナテアに向かって膝をつく

と略式の騎士の礼をとった。礼を終えた後に今までナテアについてきた者達は、ナテアの前に屈んでいる1人をの残してばらばらに散らばっていった。

不安げな、涙を溜めている目でナテアは1人残った者に尋ねた。

「みんなどこに行っちゃたの？ アル兄さまは？ ……みんな死んじゃわないよね？」

「大丈夫ですよ。アルトリート様も他の者たちも強いですから」

男は皆を信じてください、と言うとナテアの手を握り締め、立ち上がった。

どこへ行くのかは教えられていない。いつの間にこんな森の奥まで来たのだろうか。もしここで1人になってしまえば幼いナテアは生きていられないだろう。

何がナテアの周りで起こっているのか、つい今朝まではあんなに平和だったのに。

状況を判断できずに困惑するナテア。ナテアは握り締められている手を強く握り返した。

まだ小さく儚げなナテアはその体をふるふると震わせながらも、それでもきちんとして足を地に着け前を見据えた。

強くありなさい

いつも母がナテアに言っていた言葉だ。その言葉を思い出すと、震えている体に力をいれ、背筋をまっすぐと伸ばした。

いく日、日が過ぎただろうか。日が昇り、月が昇り、雨が降ればすがすがしい晴天の日もあった。

初めのころは疲れても寝たら元気になっていた。しかし不慣れな生活に加え、まともな食事はとれず子供にとっては辛い日々だった。子供ではなくても辛いだろうに、ナテアと共に歩く男も励ましはしても弱音は吐かなかった。

夜も森の獣やその他に警戒するようにほとんど寝ていないのを知っていた。

たとえ獣が襲ってきてても大抵は魔法で追い払うことはできるが、集団の場合ならば逃げるしかないからだ。

だからナテアも弱音を吐かず、また辛いときは母の言葉を思い出しながら兄に託された指輪を握り締めた。

いくつかの森を抜けると小さな町にたどり着いた。数日前は清潔なワンピース姿のナテアだったが今では汚れきったぼろぼろの姿になっていた。

ナテアにとって初めて来た町がこんな場合ではなかったらどんなにわくわくしただろう。ナテアたちは人目を気にするように町中を歩いた。

幸いなことに、中へ入るには検問所などもなくすんなりと入ることができた。

食料などの必要なものでも買うのだろうか、と男の手に引かれながら考える。

「ナテアーナ様、もう少しで目的地に到着します」

男はそういうと町を通り抜け、小高い丘を指差した。

町から少し離れた丘が目的地だといわれて、ナテアはどこ、と思いながら視線だけを彷徨わせた。

疲れ切っていたナテアは男に質問する気力が残っておらず、ただ言われるがまま、目的地である丘を登った。

あそこです、言いながら男は急に立ち止まった。

ナテアは地面の方へ下ろしていた視線を前に向ける。ナテアの視線の先にあつたのは木に囲われた屋敷だった。屋敷の周りには畑と思しきものや、馬や牛といった家畜もいるのが見えた。

そしてその屋敷全体を囲むようにして奥には森があつた。さつき通った町から離れたここの屋敷以外は緑で溢れているかのようだ。

一体誰がいるのだろう、私はこれからどうなるのだろう、とナテアは弱弱しく男へと顔をあげた。

「……私と一緒にいることができるのはここまでです」
ナテアを見降ろすようにして男が言った。

知らない土地で、また何が起こっているのかはつきりと分からない状況で幼いナテアがここまで来れたのはこの者がいたからだ。ナテアには兄が1人いるが、この者はもう一人の兄といってもいいくらい親しい間柄なのだ。だからどんなに不安になっても頑張つてくれたのに、と心では思つても口には出さなかった。

ぐっ、と唇を噛みしめ何かに耐えているナテアを見て、男はやり場のない気持ちに駆られた。

ナテアは男から視線をそらし、もう一度目的地だと言われた屋敷を見た。……すると先ほどは誰もいなかったはずの場所に1人の人間が立っていた。もしかしたら屋敷からナテア達の姿が見えたのかもしれない。

男はナテアの手を引き、屋敷の傍に立っている人間のところに向かった。近づくにつれて立っている人物の姿がはっきりと見えてき

た。姿かたちから見て初老の男性だ。年に比べて背筋が真っ直ぐと伸び、服装や髪形なども整えられていて若々しく見える。

ナテアと共に歩いてきた男は初老の男性の目の前まで来ると、ナテアの手を握っていない方の腕を胸に当て、小さくお辞儀をした。よろしく願います、と男が言うのが聞こえ、分かった、と初老の男性が返事をするのが聞こえた。

話していた大人たちが突然ナテアに視線を下ろした。空腹や疲れ、眠気などでぼうつとしていたナテアはどきりとする。何だろうと思っっていると未だナテアの手を握っている男が膝をついた。

「これからここで暮らしてください」

「うん……」

「ここにいればナティアーナ様は無事ですから」

「うん……」

ナテアは幼いながらも物わかりの良い子だった。それでも両親のことを兄から聞かされた時の様子は当たり前だが物わかりの良い、とは言えなかった。しかしあれから数日たった今では元の物わかりの良いナテアに戻っていた。

男はナテアの小さな手のひらを見つめながら、今ばかりは年相応の子のように感情を露わ^{あらわ}にしてみらいたいなどと思う。

そして家族と近しい者だけが呼んでいた愛称で小さくつぶやいた。

「……生きる、ナテア」

そして願うならばナテアが真実を求めず、新たな幸せを見つけてくれるように、と男は思った。

変わらないと思っていたもの

木々の枝葉の隙間から光が降り注いでいる。人の気配がほとんどないこの森には多くの動物たちがいた。鬱蒼うつそうとまではいかず、天氣の良い昼間などは森の中といってもかなり明るい。

そんな森の中をナテアは歩いていった。とても天氣がいいからか、太陽の光が森の中でも地面まで届き、遠くまで見渡せる。聞こえるのは風の音と鳥たちの鳴き声、そして動物の動く音。

ナテアがいる場所からほんの少し離れたところで「ガサツ」と小さく草が揺れる音がした。

森には小動物から大型の肉食動物、様々な種類の鳥に虫やへビなどが住んでいる。そして今日の目的はそんな動物たちだ。ナテアはできれば持ちかえりやすい小動物がいいな、と考えつつ肩にかけている弓を手に持った。

息を潜め、獲物が出てくるのを待つ。弓を引き絞ったままの体勢で気配を探りながら待った。

「
来た」

飛びだしてきたのはカニンだった。子供でも抱き上げられるほどの大きさで、大人しい性格の小動物。また、国内のどの森でも見ることが出来る。

肉も柔らかく食べやすいため、食用として人気だがカニンは動きが素早いのだ。また体も小さいので捕まえるのは簡単ではない。だがナテアにとってはどんなに俊敏な動物でも容易に捕らえることができた。

ナテアはその動きが早いカニンを見ると、逃げられる前に捕まえるために狙いを定め弓を放った。

「……お、ナテア捕まえたのか？」

「うん。カニン１匹だけだね。今日の夕食はカニンの肉でシチューでも作ろうかな」

ナテアが捕まえた獲物を持ってきた麻袋に入れていると幼馴染のクラウスが来た。小動物１匹捕まえたナテアとは違って中型動物のルシュを捕まえたらしい。クラウスはルシュの前足を片手で持ち、左肩に乗せている。

まだ若い雄だろう、小さな角が生えている。しかし大人になりきっていないルシュとはいっても結構な大きさだ。クラウスはナテアには重くて到底持てないものを軽々と担いでいる。

「久しぶりだなー、ナテアのシチュー。頑張ったかいがあったな！」
「そう？ クラウスが普段食べている食事のほうがおいしいんじゃない？」

「あれはあれで美味いけど、ナテアのは懐かしい味がするんだよな」
持つよ、とクラウスはナテアに手を差し出した。ナテアは持っていたカニンを渡しながら言葉を返す。

「それじゃあ今日はクラウスの為にも、ナテア特製シチューにするね！」

並んで歩くナテアとクラウスは今日の獲物を持って２人の家に戻っていった
丘の上にある孤児院へと

「おかえりー！ ナテアおねーちゃん！」

「ただいま、アベル」

ナテアとクラウドが孤児院の裏にある森から帰ってくると、2人を出迎えるように数人の子供たちが走ってきた。その全員にただいま、と言いながらナテアは子供たちを連れ、館へと歩く。

「おいこら！ 引つ張るな……つて乗るな！」

森で捕まえてきた獲物を担いでいるクラウドに子供たちが集まっている。「クラウドスー抱っこ！」「今日はお肉ー？」など言われながらクラウドの周りに子供たちが群がっていた。言葉では怒っているように言っているが、クラウドの表情を見る限りではそうでもないようだ。

しかしさすがに重かったのだろう、しばらくすると「お前ら降りないと肉食わせないからな！」と叫んでいた。

その言葉に子供たちは反応したようで「やだー」と言いながら次々に降りていった。

「みんなちゃんとお仕事したの？ 終わってない子にはご飯はないからね」

「えー！」

「あと少しのこってた！」

「わたしもー！」

ナテアがそう言うと、クラウドの周りに集まっていた子供たちは走って戻っていった。森の入り口と孤児院までは遠くはないが近くもなく、元気に走り回る子供たちを見るとナテアは微笑ましく感じた。

残ったナテアとクラウドは歩きながら孤児院へと向かう。

「あー、あいつらのせいで体が痛え」

「それだけクラウドのことが好きなんだよ。久しぶりに帰ってきたし、構ってほしいんじゃない？」

「そうかあ？ それにしてもいつの間に大きくなってんだ……」

子供たちがクラウドの体に乗ったりしたせいか、体が痛いと言うクラウド。ナテアは「持つよ」とくすくす笑いながら麻袋に入ったカニンを受け取った。

「2人とも、お帰り」

孤児院の中へ入ると、この持ち主である院長が2人を迎えた。髪のはとんどを白髪が覆っているが、その立ち振る舞いからは年を感じさせない。

その院長の後ろからナテアやクラウドの祖母と言っているくらい女性が現れた。院長と同じくらいの年齢だと思うが、夫婦ではない。この孤児院をやっていくにあたって、食事の用意や掃除、洗濯などを受け持っている人だ。この女性の他にも何人かおり、外には家畜や畑の世話をするものもいる。

できるだけのことはナテアをはじめとして、孤児院の子供たちも手伝ってはいるのだが、子供の手では間に合わないので世話をする人間がいるのだ。

世話をする人は全員ここにいる理事長と同じくらいの年、若くはない者達ばかりだ。だから分からないが、皆孫を見るような目で優しく、時には叱ったりしながら生活していた。

ここでの生活は自給自足が中心。野菜は畑からとれるし、外にいる家畜からミルクもとれる。今日のように肉が食べたければ狩りにもでかけるのだ。

この丘から下ったところにある町の人間からすれば、面白味に欠け、貧しい暮らしかもしれない。それでも屋根があり、ベッドがあり、暖かな光の下で暮らせることは幸運なのだ。

この孤児院にいるのは何らかの理由で家族を失った子供たち。

初めてナテアがここへ来た時にはまだ初老だった院長とまだ今よりも若かったこの館の人達しかいなかった。そしてナテアが来た後にクラウドが来て、そのあとに次の子が来て、とどんどん人が増えていった。

まるで新しい家族が増えるように、館の空いていた部屋は今ではどこも子供たちの声で埋め尽くされている。ナテアが来た当初、ここにはナテア以外の子供はおらず、ナテアが来た後からこの館はいつの間にか孤児院と呼ばれるようになっていた。

「ただいま戻りました」

「お久しぶりです院長」

ナテアとクラウドは荷物を持ったまま、院長に軽く頭を下げ挨拶をする。

ナテアが初めてこの館に来た日の夜、ベッドに1人で震えて泣いていたのが聞こえたのか、院長が優しく肩を叩いてくれた。院長は何も聞かず、何も言わなかった。ナテアが泣かずに1人で眠ることができるようになるまで夜はいつも、寝付くまで一緒にいてくれたのだ。

その優しさはナテア以外の子にも注がれ、院長は本当のおじいちゃんのように慕われている。

まだ幼かったナテアがここまで育ったのも院長やその他の人達のおかげだ。

もちろんナテア自身は父や母、兄や他のみんなを忘れた日など1

日もない。また時折、自分の過去は夢ではなかったのか、想像ではないのかと考えることもあった。それはナテアが両親の死を理解するのには幼すぎたせいもあるだろう。知識として知ってはいても、心では理解、納得などできるはずはなかった。

薄れゆく記憶を時々思い出しながら、ナテアは院長が何か知っているのではないかと、問いたたしたことも何度もあった。だが知らない、分からない、そしてすまないな、という言葉しか聞くことしかできなかったのだが……。

それでもナテアはここで生きていれば何か掴めるのではないかと、他力本願だと分かっているがここで10年生きてきた。

それに過去の真実を探すために行動したら何が起こるか分からないという恐怖。もう大切な人を失いたくないという思いが、何も行動を起こさず、今の生活を守るという行為になっているのかもしれない。

「今日は大物を捕まえたようだな。ナテアの料理を楽しみにしているよ」

「へへ、頑張つて作るね」

ナテアはそういうと院長と別れ、獲物を担いだままのクライスと年配の女性と共に料理場へと向かった。

子供の時からナテア達の世話をしてきた年配の女性はまるで本当の家族のように接してくれる。外では子供たちが畑を管理している男性、老人と言っていていいほどのおじいちゃんと草むしりをしているだろう。

この孤児院に来た時、ナテアは7才だった。それから10年の月

日が過ぎた。

「クラウドはいつまでここに居るんだい？」

両腕を腰の後ろにやり、若干前屈みになって歩きながら女性が聞いた。その女性は腰が曲がってはいるがその他はしゃんとしており、話す速さも滑らかで声も大きい。

「今のところは3、4日を考えてる。けど2日後、下の町に王族の誰かが視察に来るみたいで人が多くなるなら出発する日にちを変えることになるかもな」

「王族？ ダールベルクの？」

ナテアはクラウドの言葉に聞き返した。ナテアの横を歩いている女性は「そういえばそんな話を旦那さまから聞いたかね……」と呟いていた。

「そりや、ダールベルクの王族に決まってるだろ？ この国の王族なんだからな」

「それはそうだけど、でも何で今の時期？」

年に一度は王族や貴族の人間が町へ視察に来たり、その他はときどきではあるが避暑で訪れることもある。避暑、と言うのはこの辺りの地域が豊かな自然に囲まれているのが理由に挙げられるだろう。

「何でって、俺が分かるわけないだろ」

「だってクラウドは一応王国の騎士じゃん。……ま、分からないってことはそれだけ下っ端でことか」

「なんだよ『一応』って！ 下っ端で悪かったな！」

ナテアの言葉にクラウドがわざと怒ったような口ぶりをする。わざとそんな口調をしているのが分かっているナテアはくすくす笑いながら「ごめんごめん」と謝った。

「ほらほら、もう料理場についたよ」
ふざけ合っているナデアとクラウスを見て、あきれた声で女性が
言った。

町へ行こう！

「ナテアはどうするんだい？」

「……え？」

ナテアの後ろから女性が話しかけてきた。しかし料理に集中していたナテアは質問の声が聞こえず、聞き返した。

「だから町に下りるかどうするかって話。……聞いてたか？」

「ああ、ごめん聞いてなかった」

クラウスが女性の質問に付け加えるように言った。正直にナテアが聞いていなかったというところ「次はちゃんと聞いてるよ」と、今言っていた内容をもう一度話し始めた。

「さつき町に王族が貴族の方が視察に来るかもしれないって言うた
だろ？」

「2日後って話してたやつね」

「そうそう、……で町に行かないかって言ってたんだよ」

料理場へ行く途中にしていた話の続きらしく、ナテアは先ほどの話を思い出しながら聞いた。

「……でもそういった高貴な人が来るなら町は人で溢れるんじゃない？
わざわざこんな時に行かなくなっちゃっていつでも行けるし」

自然豊かな孤児院で暮らすナテアにとって賑やかな町は少し苦手と
感じる場所だった。もちろん、年頃の少女のように甘い菓子や服、
雑貨などには興味はあり、それらの売ってある町に時々に行くこと
もある。しかし見はしても、買うことはほとんどない。院長は遠慮
はするな、とナテアを含む子供たちに言っている。それでも必要な
もの以外を買うことは少なかった。

「たまには町に下りて遊んで来たらどうだい。下の子たちの面倒ばかり見て、遊ぶ暇もなかったじゃないか」

「でも……」

「旦那さまには私から言っておくし、それに1日くらいなら誰も文句は言わないよ」

「エルザさんの言うとおりにしろよ。弟や妹たちにはなんか甘いものでも土産で買って帰れば喜ぶだろうし」

「エルザさん、クラウド……」

視線を下におろし、どうするかと暫く考えた。そしてそのままの状態でナテアは2人の説得に頷き「分かった」と、行くことの意味表示をした。

「わざわざこんな時じゃないとナテアは誘ってもあまり町に行かないしな。……それに王族が来るかもしれない」

言葉の最後の方は小声で掠れたようにしか聞こえなかった。それでもそのうつすら聞こえた言葉にナテアはぴくり、と反応する。

肩を小さく揺らしたナテアをクラウドは目を細め、上から見下ろした。

「そうだねえ、こういった時じゃないと『でいーと』になんて誘えないだろうしねえ」

「そうなんだよな……って、エルザさん?!」

「会える時間が少ないからねえ。でもだからって羽目を外したらいいかんよ」

「いやいやいやいや!」

クラウドが年配の女性、エルザに向かって首を横に振りながら否定の意味を示している。エルザはそんなクラウドを皺の入った目を緩めるように見ながら「若いねえ」と返す。

ナテアはあわてた様子のクラウドとエルザを眺めながらクラウド

が囁いた言葉をポツリと繰り返した。

「王族が来るかもしれない」

ナテアの横ではまだクラウドスとエルザが話していた。ナテアはその様子をちらりと見るとくすりと笑った。そして3人で話している間に料理する手を止めていたのを再開し、手元を見ながら何かを考えるように眉間にしわを寄せた。

+ + + +

「ナテアおねーちゃんお菓子忘れないでねー！」

ナテアが孤児院から外に出て、丘の下にある町へ行こうとしたら後ろから声がかけられた。その声に反応したナテアは後ろを振り向く。振り向いた先にいたのは3人の子供たち。ナテアが出てきた玄関の扉から顔を出し、手を振っている。

「分かったからみんなきちんとお仕事と勉強してね！」

「「「はぁーい！」」」

すでに玄関から少し離れていたナテアは3人に声が聞こえるようにと、大声で言った。

そのナテアの声ははつきりと聞こえたようで、3人は元気よく返事を返した。

「クラウドスー、ナテアおねーちゃんを頼むよー」

3人のうちの誰かがナテアの方を向いたままそう叫んだ。残りの2人はけらけらと笑っている。

「クラウドスお兄ちゃんと呼べって何度も言っているだろ！」
そう言いながらクラウドスはナテアの横に立った。いつの間に来たのだろうかと思いつながらナテアは話しかける。

「クラウド、待ってたなら声かけてくれればよかったのに」

「ん？ 話しかけようとしたら丁度、あいつらが大声でナテアのことを呼んでたからな」

行くか、とクラウドは孤児院の方向を向いているナテアを促す。

そしてまだ玄関で騒いでいる子供たちに「あまりエルザさんたちを困らせるなよ」と一喝した。

町は丘の上にある孤児院から下ったところにある。歩いて行ける距離だが天候などによつては馬や馬車に乗って行くことも少なくはない。歩いて行くには途中、日差しをよける場所や休憩する場所がないからだ。

ナテアとクラウドは話をしながら丘を下る。日差しは強く、ナテア金髪とクラウドの赤髪が太陽の下で輝く。荷物の量によつては、帰りに馬車に乗るか、馬を借りるかと相談しながらナテアとクラウドは町へと続く道を歩いた。

「……うわあ、人がたくさん」

「まるで何かの祭りみたいだな」

町へ入るとどこもかしこも、人で溢れていた。王族または貴族が視察に来るといふ噂が広がっているのだろつ、ひと目見るために集まった人々で賑わっている。

「えーと、とりあえずどうする？」

予想以上の人の多さに、慣れない様子のナテアがクラウドに尋ねた。

「そうだな、飯でも食つか。この様子じゃ先に買い物しても邪魔なだけだからな」

「それもそうだね」

辺りを見回しながらナテアはクラウドと離れない様に歩く。久しぶりの町というのもあってか、まだ着いて少ししか経っていないというのに疲れを感じていたナテアはクライスの提案に大きく頷いた。カラン、と店の扉に付いているベルを鳴らしながら中へと入った。町の通りとは違って店内に客は少なく、静かな空気が流れている。いらっしやい、と奥から聞こえてきた。ナテアとクラウドはその声を聞きながら、通りが見える窓際の席についた。

「想像以上だな。……誰が来るかわかってんのかな？」

クラウドの声にナテアはため息を小さく吐く。

「もう少し離れた場所に行けばよかった……」

ナテアの言葉に軽く笑うとすみません、とクライスは店内に向かって手をあげた。

「俺がいる城下、王都は毎日こんな感じなんだけどな。まあ、ここからでも通りは見えるし、一時^{いつとき}ここにいるか」

「お願いします……」

ナテアが疲れた顔を見せっていると、店の奥から店員が来て注文を聞いた。クラウドはコーヒーだけ頼み、ナテアはサンドウィッチを頼んだ。

「お客さんも王都からいらっしやる方々を見に来たのかい？」

お待たせしました、とテーブルに注文したものを置きながら店の人が話しかけてきた。他に店員らしきひとは見当たらず、注文する際も同じ人物だったので店長なのだと思われる。

「はい、とはいってもこの人の多さには驚きました」

店の人の言葉にナテアは肩をすくめる。

ははは、確かにね、と笑う店の人にクラウドが聞いた。

「誰が来るとかは分かっているんですか？」

クラウドスの質問に店の人はああ、と答える。

「今朝聞いた噂では確か直系の王族のだけれか、だったかな。……王子か王女かまでは分らんが」

「王子か王女ですか……」

この国には3人の王子と1人の王女がいるのは周知のこと。クラウドスは質問に答えてくれた店の人にありがとうございます、と返した。

「個人的にはお偉いさんたちはあまり好きじゃないんだけどね……。この領主さまはいいが、……町のみんなはどう思っているのか」そう言いながら店の人は新しく来店したお客の元へと向かった。

店の中からも外にいる人の声が聞こえてくる。大勢の人間でひしめき合う通りを見ながら、早めに店に避難して良かったとナテアは思った。

外の通りでひと際ざわり、とするのが聞こえた。そのざわめきは徐々に大きくなる。

「ナテア、外見てみる」

クラウドスはそういうと立ち上がり、窓の方へと向いた。ナテアもクラウドスにつられて立ち上がる。

「……あ、」

「………見えたか？」

外から聞こえる声が一段と大きくなったと思った時、馬車を通るのが見えた。通りには多くの人がいて、はつきりではないがその馬車から流れるような銀髪には気付いた。ふわり、と風に揺れるようにキラキラと銀色に輝く長髪だった。

「王女さま、か」

立ったままポツリ、とクラウドスが言った。ナテアは窓に手をつき、もう通りを過ぎ去った馬車を目で追っていた。

いつの間にか椅子に座っていたクラウドがまだ立っていたナテアに声をかける。

「……もう少ししたら出るか」
「そうだね」

ナテアは小さくそういうと席に着き、手をつけていなかったサンドウィッチを口に入れた。

店を出た後、ナテアとクラウドは子供たちへのお土産や細々とした必要なものを買った。孤児院ではなかなか食べることのできない甘い砂糖菓子や文房具などだ。文房具は子供たちの勉強で使う。

ナテアのいる国、ダールベルク王国にはもちろん学校がいくつかある。学校の数はいくつか、入学は簡単ではないが卒業すれば国の役人になれる。しかしナテアのような孤児や下にある町から学校に入学できるのはほとんど……いや、限りなく無いに等しい。

そのことについて疑問を抱かず、当たり前だと思っている人々がほとんどだ。だが、ナテアいる孤児院の院長はそのことに疑問を抱いており、個人的に子供たちに文字や国の歴史などを教えている。

「なんだ？ それだけか？」

もつと買えばいいのに、とナテアが持っている荷物も見ながらクラウドが言った。

「あまり買つと帰りがきついからね」

店の外で待つていたクラウドの傍に寄る。

荷物が多いなら馬や馬車で帰ればいいとクラウドが言っていたが、歩いて帰れるならそうしたいとナテアは考えていた。

ナテアの考えていることが分かったのか、クラウドは「ナテアらしいな」と口元をゆるめる。

「じゃあ日が傾く前に帰るか」

「そうだね」

昼間は町に王族が来るといふことのでかなりの賑わいを見せていたが、ほとんど今ではいつも通りの町並みだ。

「……いつ帰ってくんだろうな、あいつ。もしかして俺らのこと忘れてんのかな」

孤児院へ帰るために丘を登りながらクラウドは笑っている。ナテアもつられてくすくす笑った。

思い出の場所

孤児院の外には色とりどりの小さな花があちらこちらに咲いている。特に誰が手入れをしているわけではないが、毎年暖かなこの時期になると孤児院を囲むようにほころびる。そしてその花は玄関や広い食卓にある花瓶に生けられ、飾り気のない建物内を彩っていた。そんな花達を摘んでくるのはナテアが妹、弟と呼んでいる下の子供たち。今年も女の子たちが中心となって様々な種類の花を摘んできた。

数年前から始まり、今では春の行事のようになっていた。今年もナテアは妹達と協力して花瓶に生けた花を飾っていた。

ナテアは花が咲き乱れるこの季節が好きだった。花だけではなく、丘に吹く暖かな風も。そして丘や森はナテアを懐かしくも感じさせた。

また、孤児院の裏にある森の中にもナテアがこの時期を好きだと感じさせる場所があった。その場所は昔、幼馴染であるクラウドとそしてもう1人の幼馴染とよく遊んだ場所だった。

「クラウド、こんな所にいたの？」

ナテアは泉の淵に立っている幼馴染に声をかけた。

「ナテアか。……今日で出発だから、その前に一度ここに寄っておこうと思って」

声をかけられたクラウドが泉とは反対方向にいるナテアに振りかえる。

先日、下の町に王都から王族が視察にきて2日が経った。まだその余韻が残ってはいるものの、ほとんどが普段の生活にもどっている。クラウドは町が落ち着きを取り戻した今日、自身も王都へと

帰ると話していた。

「そう……。でもあつちに帰る前に一度、孤児院に寄るでしょ？
急にいなくなるとみんな寂しがるよ？」

ナテアはそう言いながらクライスの方へと歩み寄った。泉の水はそこに住む魚たちを見ることができるとほど透明感がある。森に囲われたこの場所はナテア達の思い出の場所。空から見たらぼつかりと空いているであろうこの泉に太陽の光が降り注ぐ。

風は暖かくなったものの、まだ冬の名残を残す森の泉は冷たいだろう。ナテアはクラウドスの横に立つと、しゃがみ込んだ。

「今年も来なかったな、あいつ」

泉のほとりにしゃがみこんだナテアに向かってクラウドスは呟いた。小さな声だったが、森の静かな空間の中でははっきりと聞きとることができる。

「……分かってる。それと、クラウドスが私を町に誘った理由も」
ナテアはそう言葉を返しながら泉の透き通る水に触れた。やはり冬の名残を残しているのか、水は暖かな陽気に比べてひんやりと冷たい。

「まあ……。あいつのこともあるが、たまには外に出た方がいいんじゃないか？ いつまでもここにいろわけじゃないんだし」
目では上から見下ろすように言うクラウドスはどこか遠くを見ているようだ。

「それは……」

「なんていうかき、俺らはもう子供じゃないんだし。久しぶりに会ったけどあいつらも随分成長してた」

孤児院のある方向に視線を向けながらクラウドは言った。しかしいつまでたっても返事が返ってこないのを不思議に思い、ナテアへと視線を戻した。

「ナ、ナテア？」

膝を抱えうずくまるナテアにどうしたのかと尋ねる。それでも反応がないナテアにクラウドはあわてた。

反応もなく、丸まっているナテアに何かしてしまったのかと両手を振りながらナテアに声をかけ続ける。

「クラウドス……」

屈みこんだまま動かないナテアはそのままの体勢で囁くように名前を呼ぶ。その声が聞こえたのか、クラウドは動かしていた腕を下ろす。

「私たちはもう子供じゃないんだよね」

そう言いながらクラウドに並ぶように立ちあがった。座らずに屈んでいたからか、ナテアは足が少ししびれているように感じる。

「俺らだけじゃなくて下のあいつらもいつかは大人になるよ」

「そうだね……」

「でも、」

向かいあうようにしてナテアとクラウドは立っていた。でも……、と続けるクラウドにいつの間にかこんなに背が高くなったんだろう、と思いながらナテアは言葉に耳を傾ける。

「ここは変わらない。もちろん俺も、まだ会っていないから分かんないけどあいつだって変わってないと思う」

水面で魚が跳ねる。森の中にあるここはいつも時間がゆったりと

流れていた。キラキラと輝く泉にひっそりと咲く小さな野の花。今の季節はいたるところに花が咲いているが夏、秋、冬になればまた違う様子を伺うことができる。

普段よりもいくぶん真剣な顔で話すクラウドにナテアは「ぷつ」とふきだした。そんなナテアを見たクラウドは唇を尖らせ、ムツとする。

「……なんだよ、なんで笑うんだよ」

「だって……クラウドの真面目な顔、久しぶりっていうか」

ナテアは手の甲で口元を押さえながら笑いを殺す。

「俺はいつだってマジメなつもりだ」

「ええ、恰好つけてるかと思った!」

くすくす笑うナテアに対しクラウドは手を腰にあて、にやりと口角をあげる。

「惚れたか?」

クラウドの言葉に対し、ナテアは「あはは!」と声を立てた。

「はははっ! 何でそこで惚れたってなるの?」

動物の鳴き声や風の音しかない森にナテアとクラウドの笑い声が響く。笑いながらナテアは心の中でほつと溜息をついていた。真剣な顔で「変わらない」と言ったクラウドの横顔。口では変わらないと言っているのに、その横顔が、雰囲気、声の低さが前よりも違っただけだから。

下から見上げたクラウドに一瞬どきりとした。ナテアはその動悸を隠すかのように声をあげて笑う。

2人で笑い合っているとさき、と枝の揺れる音がした。森の動物ではなく人の気配に、音が鳴るよりも前に気付いたナテアとクラウドは笑いの止め、同時に振り向いた。音がしたのは泉に来たナテアが最初にいた場所。その場所から1人の人間が現れた。

「うそ……………」

「まさか、」

生い茂る枝葉をかき分けながら、泉へやってきたのは1人の青年だった。日差しに反射するように輝く銀色の髪。

森には下の町や他から獵師などが狩りをするためにくることがあるが、それ以外の人間が、しかも若者が用もなく来ることはほとんどない。しかしそういった事をなしにしても見間違えることはないだろう。

目を見開き、固まったままのナテアの横でクラウドが小さく言った。

「まさか、………… ヴィー、なのか？」

クラウドが呼ぶのは幼馴染の名前。数年ぶりに聞いた名前にナテアは懐かしさが溢れた。

笑顔の記憶

ダールベルク王国内の片田舎にある小さな町、ヴィルデ。そのヴィルデの丘の上には孤児院と呼ばれる屋敷があった。数年前までは隣国との国境沿いであつたヴィルデは、今では国の領土拡大のために自然と、国境とは離れた場所に位置している。町自体には特に目立つた特産物があるわけでもなく、有名な観光地があるわけでもない。それでも国が領土拡大する前までは、国境の町として商人や吟遊詩人、時には他国の人間なども町を訪れていた。しかし今現在、広大な領土に住む国内の人間でこのヴィルデの町を訪れようとするものは数えるほどだった。

だが一般の民が来ようとは思えない、そんなヴィルデの町にわざわざ訪れるもの達がいた。

「あ！ やつときた！」

孤児院の裏にある森の中、その森が開けた場所にある泉に3人の子供がいた。先に泉にいたのは1人の女の子と1人の男の子。女の子は長くふわふわとした金髪を紐で2つにまとめている。泉の周りに生えている野花を摘み、編んでいたのか、女の子の周りには色鮮やかな花輪が落ちていた。

「おそいぞ、ヴィー！ 俺たちがどれだけまつたと思ってるんだ？」

次に声をあげたのは女の子の横にいる男の子。座って花輪を作っている女の子の隣で寝ころんでいたためにその女の子よりも少し遅れて、今来た男の子に声をかける。起き上がると地面に直に体を横たえていたせいで、背中や短い赤銅色の髪に草や花びらがついてい

た。

泉の近くにいた2人が声をかけたのは森から現れた1人の男の子だった。体格から男の子を呼ぶ2人よりも少し年上だと分かるが、自信のなさそうな、大人しそうな表情から実際の大きさよりも小さく見え、赤銅色の髪的少年と同じくらいに感じる。

その大人しそうな少年は泉で少年を待っていたらしい2人よりも格別に身なりの良い服を着ており、靴も森の中を歩くには綺麗過ぎていた。しかし少年に目を向けるとしたら上質な服や靴でないだろう。

銀色に輝く髪。風でさらさらと揺れる様はまるで上等な絹にも見え、加えて整った容姿によって、少年を夜空に輝く月の使者だと言うものもいるかもしれない。

そして少年は2人の元へと歩み寄りながら申し訳なさそうに眉を寄せる。

「ご、ごめん……。抜け出すのにちょっと手間取ってしまった。……お詫びというか、これ持ってきた」

はい、と言いながらヴィーと呼ばれた男の子がポケットから小さな何かを取り出した。子供の片手で収まる程のそれは、繊細な刺繍が施された白いハンカチに包まれたもの。ヴィーは中身を落とさない様に、そのハンカチをそつと開く。

「わあー、きれい！ これくれるの？」

「なんだこれ？ ガラス玉、か？」

ヴィーが持ってきたものは親指の爪程の、一見したらガラス玉に見えるものだった。小さなそれに、ナテアは空色の瞳をキラキラ輝かせながら覗きこむ。

「ちがうよクラウスー。キャンディーだよ、これ。……ヴィー、食

べてもいいの？」

「うん。ナテアとクラウドについて思って持ってきたから。全部いいよ」

ヴィーがそう言うや否や、ナテアはいくつかあるうちの1つ、赤いキャンディーを摘み、口に入れた。

「あまーい！ ムムの実の味だーっ。クラウドも食べなよ！」

きやつきやつと笑顔のナテアを見ながら「こんなきれいな食べ物なのか？」と言いながら恐る恐る、ぱくり、と口にした。

「ねえヴィー、どうして今日はおそかったの？ もしかしてキャンディー持ってきたから？」

溶けて小さくなったキャンディーをカラカラと口の中で転がしながらナテアが言った。同じくクラウドも噛まずに、味わうようにして舐めている。

「んと、少しごえいが、……人が多くなって。で、でも大丈夫だから！」

ナテアの質問にしょんぼりとした様子を見せるヴィー。幼いナテアから見ても、ヴィーがナテア達のような孤児、いや、町の1番裕福な家の子供より身分が上だと気づいていた。しかしヴィーはそのことについて話そうとはせず、またナテア達もヴィーについて聞くとはせずに友人として迎え入れていた。

「それよりも、さっきは大きな声出してわかったな。今日はどれくらいいいんだ？」

初めは恐々と口にしたキャンディーが気にいったのか、クラウドは機嫌よくヴィーに話しかける。

「え、えと、昨日よりは早く帰らないといけないかも……。抜け出

していることがばれたらここには来れなくなるだろうし……」

しょんぱりとしていた体がさらに肩を落としたことで小さくなる。

そんな様子のヴィーをみてクラウドが慰めるように声をかけた。

「あんまりむりして来んなよ？ 家の人に怒られるかもだしさ。それに来年もあるし」

「そうだよ！ 来年も3人であそびたいから、今ヴィーが怒られてここに来れなくなるのは嫌だよ！」

「……うん。ありがと」

クラウドとナテアの言葉に少し照れた様子のヴィーの顔。ぎこちなく唇の端をあげて笑うヴィーを見て、ナテアは周りに咲く花達のように笑顔になった。

ヴィーの小さく笑う様子を見ていたクラウドは腕を組みながら言った。

「ヴィーはさ、あれだよな。なんて言うか、堅い！ もっとこう、『にいつ』と歯を見せて笑ってみろよ」

そう言いだすとクラウドは自身の両頬を引っ張りながら「わりやえ」とヴィーに顔を向ける。

しかし笑いだしたのはヴィーではなく、

「きやははははっ！ なにそれーっ、変なかおー！」

両手をお腹に当てて大声で笑うナテアだった。

素直に笑うナテアに気分が乗ったクラウドはさらに続ける。そして初めはどのように反応すればいいか分からなかったヴィーも、口を大きく開けて笑いこけるナテアを見て、たまらずに爆笑した。

「あははは！ ふふ、ははっ！ 何、その顔っ、おもしろいっ」

まるで腹をよじるように笑うヴィーにクラウドは満足した様子だった。

「それが『笑う』ってことだ。ヴィーはいつも偉い大人みたいな風にしか笑わないから気持ち悪かったんだよな」

頬から手を離し、赤くなっているのを労わるように揉みながらクラウスは言った。

遠回しでもなく、嘘でもない本当の気持ちをはっきりと伝えるクラウスに一瞬目を大きく開いたヴィーは口角をあげ、苦笑いした。それでも気分を害した感じでもなく、「わかった」と逆に嬉しそうに言葉を返した。

「クラウスの顔もちよつと気持ち悪かった」

「はあ?! あれはわざとだし。わ、ざ、と!」

先ほどのクラウスを真似するように、ナテアが頬を軽く伸ばした。クラウスはそれに唇を尖らせてむっ、とした表情になる。

「……はは、ふははっ!」

その様子を見ていたヴィーが突然笑い出した。元々あまり笑わないヴィーに、今日2度も声をあげる姿を見たナテア達は驚いた顔をする。ナテアとクラウスが言いあうのを止めてもまだ笑い続けるヴィーに2人も自然と笑みを漏らした。

ナテアとクライスがヴィーについて知っているのはほんの少しだけ。名前と年と、上に兄がいて下には妹がいるということ。

ナテア達2人がヴィーに出会ったのは丁度1年前の今頃の季節。2人がこの泉のある場所で遊んでいたときに、偶然ヴィーがやってきたのがきっかけ。遊ぶ、というのは薬草を摘んだり木の実を拾ったりという2人の仕事の合間だったりもしたのだが。この町の子供ではないというのはすぐに気がついた。自分たちや町の子供の身なりの違いで分かったのだ。

気がついたら毎日一緒にいた。名前を知っていて、友達になっていた。

そして1年前の春の終わり、夏になりかけた頃、ヴィーは急にいなくなつた。

悲しくなかつたのは、それでもまた会えるとなんとなく分かっていたから。たった数カ月だったけれども、子供のナテア達にとって友達になるのには時間の短さなんて関係なかった。

そして今年もまた会うことができた。初めて出会ったこの泉で。小さく風が吹き、花びらが舞う。ナテアが摘んだ花も風に揺れている。

今年はまだ春、花の季節で夏は遠い。だから3人はもう少しの間、この泉で遊ぶことができると思っていた。

だけどその「もう少しの間」は突然消えた。

大声で笑いあつた次の日、急に来なくなつたヴィーをナテアとクラウスは心配したが探すことはできなかった。知っていることが少なすぎたから。そして3人で話した「来年」もその次もやってはこなかった……。

あれから毎年、春になるとナテアはこの泉に足を運ぶようになってた。成長するにつれて、兄弟たちの世話や仕事に追われるようになり、訪れることが少なくなつた思い出の泉に。

騎士見習いになるため、王都へ行ったクラウスも春には必ず休暇のついでに孤児院へ戻ってくる。ヴィーが来ることはなかったのだがあのころを思い出すように、泉に行った。気付くと、春になれば必ず泉へと向かうようになっていたのだ。

そして突然の別れから数年後

ナテア17歳の春。

「まさか、……ヴィー、なのか？」

クラウドスがナテアの横で小さく言った。

「ああ、久しぶりだな。……クラウドス、ナテア」

懐かしい友人に再会した。

身分と友達

森の泉にいるのは3人の、子供というよりも大人に近い青年達。それでもまだ若干の幼さを残した様子の彼らは互いに見つめ合うように立っていた。

「ここに来れば2人に会えると思った。正解だったな」

そう言いながらナテアとクラウスのいる泉の方へ歩いてくるのは成長した姿のヴィーだった。会わなかった数年の間に成長したヴィーだが、新緑を思わせる色の瞳や銀色の髪は2人の記憶の中と一緒で変わらない。

何が起こっているのか分からない、といった表情の2人にヴィーは目を細める。

「本当にヴィー、だよな？」

「……ああ」

「本当の本当、よね？」

「ああ、……って何度言わせるんだよ」

クラウスとナテアが交互に呟く。その2人は揃ってぼかんと口を開けている。泉には毎年訪れていたがヴィーと会うことはこれまでになかった。そしてヴィーは相変わらず2人とは比べ物にならないほどのいでたちだった。2人は再会を期待していたが、自分たちとヴィーとの関係を考えてこれから会うことはないと思っていた。クラウスとナテアは予想外の出来事に驚くことしかできない。ヴィーはそんな2人を見て苦笑いしながら歩み寄った。

「あの時、急にいなくなつてすまなかつたな」

あの時、とはナテア達3人が最後に会った時のことだろう。ヴィー

「は2人の前に立つと、まず別れを告げずに去ったことを謝った。

久しぶりに再会した友人を目の前にして、クラウドは少しばかりたどたどしく返事をする。

「……あの時って？ まあ、……あれからちょーつとは時間経ったな」

「そうだね。ま、クラウドは『今年もヴィーは来ないな』なんて、寂しがってたけど」

「は、はあ？ 別に寂しがってはねーよ！」

にやり、とするナテアに向かってあわてた口調のクラウド。

ヴィーはクラウドとナテアの反応に1度目を見開くと小さく口元を緩めた。そして2人のやり取りを見やると口をはさむ。

「そうか。クラウドは俺が急に消えて寂しかったのか」

「はあ？！ だ、だからそんなことひと言もいってねーし！」

「またまた」。私、知ってるんだからね。毎年この時期になるとここに來てたでしょ」

下から見上げるナテアと目の合ったクラウドは顔をそらしながら「別に、たまたまだし！」と声をあげる。

照れているのか、顔を背けたクラウドを見てナテアが笑う。笑われたことと照れ隠しの為か、少し不機嫌になったクラウドは唇を尖らせ話を変える。

「そんなことよりもさ、……ヴィーって変わったよな」

そう言いながらヴィーを見るクラウドに、ナテアも頷く。

「確かに。身長なんかはかなり変わったよね。なんだか雰囲気も違うような気もするし、最初は誰だかわかんなかったよ。でも次にはすぐヴィーだって気付いたけどね！」

ナテアはうんうんと首を縦に振る。

幼いころの姿しか記憶にない2人には余計にヴィーの変化に目が

いった。まだ久しぶりに会って少ししか話していないが、話し方や雰囲気、立ち振る舞いが昔と違うことが分かる。髪色や顔立ちなどの容姿がナテア達の知っているヴィーの面影を残していたため判断することができていたが、もし再会した当初に兄弟、または親類だと言われれば2人はそれを信じたかもしれない。

「そうか？ 変わったと言われればそうかもしれない。変わらざる負えなかったから……」

初めて出会ったころのように、ヴィーは感情を表さずに言った。
尚も続けようとするヴィーにナテアが声を重ねる。

「でも、私たちは覚えてるから。あのころのヴィーを」

ナテアは笑みを浮かべながらヴィーを見やった。

「……そう言うナテアは変わらないな。いや、小さくなったか？」

「ええっ？ それはヴィーがおっしくなったんでしょ！」

「ははは！ 確かにちっこいな、ナテアは。細ッこいしな。ちゃんと食べてんのか？」

ヴィーだけではなく、クラウドにまで小さいと言われたナテアは2人を睨むように見上げる。しかし2人にはナテアの睨みは効かなかった。涙を浮かべながら見上げる少女など、可愛くは感じてみ怖くは感じない2人はそれでも一生懸命に睨んでいる様子のナテアを見て、頬を緩めた。

「そつえばさ、何で今まで来なかったんだ？ あ、別に言いたくないならいいけどさ。……俺ら2日前に町へ降りたんだぜ、噂を聞いて」

まだ怒っているそぶりのナテアを横目で見ながらクラウドが問かける。さきほどもでのたどしさはもうない。

何かを含ませた言い方に、ヴィーはナテアから視線をそらしクラウドに顔を向け目を見たかと思うと、視線を下へ向けた。

「……あの時は俺も馬車に乗ってはいたんだが。というか知ってたんだな、俺のこと」

ヴィーはそう言うのと下げた視線を元に戻す。顔をあげるとクラウドだけではなく、ナテアもヴィーを見ていた。

「あの頃は知らなかったんだけどね……。私たちにとってはあまりにもかけ離れていたから」

何も知らなかった頃を思い出しているのか、ナテアの目は遠くを見ているようだった。

ヴィーはナテアを見ると気づかれない様に唇を噛んだ。ナテアと同じようにクラウドも何か思っているのか、どこか違うところを見ている。そしてそんな2人を一瞥し、心の中で小さく呻いた。

2人も他のやつらと一緒になのか、と。

ヴィーの周りにいる人間は大抵、彼の容姿を伺うと媚びへつらうか恐れるかのどちらかだった。それは彼より年上であっても、また見ず知らずであってもだ。そういった目で見ないのは彼の家族と唯一の親友だけだ。

いや、妹以外の家族はまた違った目で見ているな。ヴィーは家族の顔を思い出すと「ふっ」と鼻で笑う。

「……ヴィー？ どうしたの？」

ナテアが覗き込みながら聞いてくる。

目の前にいる2人はどのような態度に出るのだろうか。幼いころを知っている間柄だからと、何かを求めてくるのか、それともこれからは関わらないでくれと恐れるか、だ。

ヴィーはこれまでの経験からこれから起こるであろう出来事を予測する。苛立ちを顔に出さない様に。しかしもしかしたら……

「2人は俺が誰だか知っているんだろう？」

知らず知らずに低く、人を威圧するような声色で問いかけた。

そしてヴィーは2人が媚びた目つきで自分を見る姿を想像すると眉間にしわを寄せた。

「王子様でしょ？」

「……………は？」

ヴィーはあっけらかんと答えるナテアに、今度は自身がぽかんと口を開けた。

ナテアはそんな様子のヴィーを見てきょとんと首を傾げる。

「え、まさか違った？！ うそ！ 恥ずかしいっ」

ぽかん、としているヴィーを見て間違っと思ったらしいナテアが口に手を当てながらあわてている。

「そんなことはないはずだけどな？ ヴィーは銀髪だし。いや、王族かそれに近い大貴族か？」

ナテアの横でぶつぶつとクラウスがいつている。

特に演じているわけでもない様子の2人をみたヴィーはいつの間にか眉間のしわをといていた。

「いや、2人の考えていたので合っている。…………俺はこの国、ダールベルク国王の息子だ」

最初に予想していたのとは違った2人に少し肩の力を抜きつつも、はつきりと身分を明かした今、どのような反応を返すのかと気を張りながら目の前の2人を見つめた。

「ナテア！ やっぱりな、俺の言ったとおりだろ？」

「うわぁ、ヴィーって本物の王子様だったんだ。でも言われれば確かについて感じ」

クラウスとナテアはそれぞれ声をあげ交わす。そして容姿だの、

服装だの、気品だのと次々とヴィーが王子であるという理由を述べていった。

2人だけで盛り上がっていく会話にヴィーは少したじろいだ。それと同時に今までにない反応になんと続けたらいいか分からなかった。

「な、何かないのか？ 俺に言いたいこととか……」

ヴィーは自分で素晴らしいながら、これまでのことを思い出していた。

自分の周りにいる貴族、一回り以上年上の者でも王族の血を引く証の1つである自分の銀髪を見れば、見ている側が不快になるほど腰を低くし話しかけてくる。貴族の令嬢ならば誘うような上目づかいで、またこちらと同じように不快に感じるほどの態度で接してくるのだ。

「んー、特にないな。……しいていえば苦手だ」

「え、クラウスって王族の人で知ってる人とかいるの？」

ヴィーはクラウスの言葉に、過去の出来事を思い出し再度眉間に寄せていた皺のまま聞き返した。

「普通は……王子だと、王族だと分かったら媚びるか恐れるかのどちらかはずだ。2人は俺に対して何も無いのか？」

戸惑いの表情で話すヴィーにナテアとクラウスは「どうして？」と不思議なものでも見たかのように、互いに顔を見合わせる。

「普通って……確かにヴィーの周りにはそうかもしんないけどさ、別にヴィーが王子と分かってても媚びたり怖がったりするのは変じゃないか？ 友達だろ？」

クラウスの言葉にヴィーは大きく目を開く。当たり前だろ、と言うように語るクラウスにヴィーは自分の態度を悔いた。

「私も、……王子だからって、王族だからって関係ないと思う。っ

て言っても孤児院出身の私たちがヴィーと友達だなんて本当は恐れ多いことかもしれないけど。でもここにいる間だけ、3人でいるときだけは友達と言ってもいいでしょ？」

ナテアは白い歯を見せながら言う。

ヴィーは2人の言葉を聞き、自分自身が考えていたことを思い出し恥ずかしさを感じた。自分は2人を疑うような目で見ていたのに、クラウドとナテアは真っ直ぐに自分だけを見ていたからだ。

「ああ、……俺はここで出会ったのがナテアとクラウドでよかったよ」

目を細め、ゆるく笑いながら言うヴィーに2人は笑顔を返した。

重なる偶然

「ヴィーが今日来てくれてよかった。1日でも遅れたらこうやって会えなかったよ」

久しぶりに再会したナテアとクラウス、ヴィーの3人は泉から移動するために、森の中を歩いていった。

泉から森の外まで整備された道はない。そのため人ひとり通れるほどの細い獣道を縦に並んで進まなければならなかった。草が生い茂っている道は知らない人間ならば気がつかないかもしれない。先頭にはその道を歩くのに慣れたナテアがいた。

「1日でも、とはどういうことだ？」

前に行くナテアの背を見ながらヴィーが首を傾げる。ナテアは道を阻む枝を鬱陶しげに払い前を向いたまま話した。

「クラウスは今日で王都へ帰る予定だからね。ここ数年はクラウスにもあまり会えなかったし、こうやって3人で会えたのは本当に偶然！」

「クラウスは王都で暮らしているのか？」

ヴィーの問いにクラウスは得意げに口を開いた。

「まあ騎士見習いとして、な。いつか必ず正騎士になるつもりだ」

ナテア達のいるダールベルク王国には騎士制度がある。騎士は国を防衛し、町の安全のために働き、そして一度戦争が起きれば国の為に剣を抜く者たちだ。まだまだ戦争や内紛が多く、戦いの為に命を落とすことさえある職業の為、国民からは憧れのまなざしで見られることも少なくはない。

「正騎士って！ 大きく出たね」

「うるさいぞ、ナテア！」

ははは！ と笑うナテアにクラウドは後ろから声をあげる。

騎士には3つの階級が存在する。それは正騎士と準騎士、見習い騎士だ。見習い騎士は若者がほとんどで、準騎士になるための訓練を受けている。そして1番人数が多いのは準騎士。見習い騎士を卒業したものか、または貴族の子弟がこれになれる。その準騎士で何らかの功績をあげた者が正騎士になることができるのだ。正騎士と準騎士の違いは位の差、正騎士は騎士団だけではなく国政にも影響を与えるのだ。もし平民での人間が正騎士になれば貴族と同等の、元々貴族の人間ならば大臣などに及ぶほどの権力になる。

しかしそれだけの権力をもつ正騎士には簡単になることはできない。騎士としての力量はもちろん、聡明さや内政、外政の知識、その他いろいろなものが求められるからだ。

ダールベルク王国に住む人間ならば誰もが知っている事実だ。だから騎士を志す者でも正騎士を目指す者は少ない。それでも正騎士になると言いきるクラウドに、ナテアは笑いながらも心では応援していた。

「騎士、か」

ヴィーはナテアとクラウドを見ながら何かを考えるように手を口に当てた。

「それじゃあ一度孤児院で必要な荷物を持ってから町へ行くでしょ？」

「そうだな。準備はしてあるし。ま、そもそも荷物自体少ないからな」

森からでた3人は体に付いている葉や枝を払いながら孤児院へと向かう。敷地内の畑の方からは子供たちの笑い声が聞こえる。遊びたい盛りの子供たちだが、ナテアを含む年長者の言いつけを守り、仕事をこなしているようだ。

「じゃあ俺、準備してくる」

「院長にあつたら挨拶してよね！」

わかった、とナテアの声を背中で聞きながらクラウドスは孤児院の館の中へと入っていった。

扉が閉まるのを見届けるとナテアはヴィーを振り仰ぐ。森から出てあまり言葉を発さなかったヴィーを見ながら、そういえばヴィーとここに来るのは初めてだと気がついた。

「びっくりした？」

ナテアの言葉にヴィーは「いいや」と首を振る。

「……いや、やはり少しは驚いたかな」

「でしょ？ 敷地自体は広いし、館もりっぱだけど所々痛んでいるし。それに館に合うような庭園なんかじゃなくて畑が館を囲んでいるしね」

自嘲するナテアを見下ろすヴィーは笑みを浮かべながら「違う」と再度首を振った。

「この場所を見たのは初めてではないからそう驚いてはいない。ただここは相変わらず、暖かいな」

一度大きく瞬きをして言葉の意味を理解したナテアはにこり、と笑った。

「ナテア、帰ったのか」

館からではなく、子供たちの声が聞こえていた畑から現れたのは院長だった。泥で汚れた動きやすい服装に日よけの帽子を被った様相は、普段館にいるときの姿とはかなりかけ離れている。遠くにはまだ子供たちの声が聞こえているところから、他の大人も一緒に付いているのだろう。

「ただいま戻りました」

ナテアは小さく礼をすると話を続ける。

「クラウドスが今から町を出ると。だから下まで見送ろうと思って」
そうか、と返す院長はナテアから隣に立っているヴィーに視線を

向けた。

「まさかとは思いますが、もしやヴィルフリート殿下では？」

「……さすがにこの姿では私が誰だかすぐに分かってしまうな」

太陽の下で銀色に輝く髪を摘まみ、苦笑いする。そしてヴィー、ヴィルフリートは地面に膝をつこうとする院長に手のひらを立てて制した。

「私は頭を下げさせるために来たのではない。友人に会いに来ただけなのだ。それでも膝をつこうというのなら私も頭を下げ、この地の領主である貴殿に非礼を詫びよう。突然来て驚かせたのは私なのだから」

ヴィルフリートの言葉で頭を伏せ、膝をつこうとしていた院長が顔をあげた。

「子供の話だと、最後まで聞きはしても真剣に耳を傾けたことはありませんでした。しかし本当に銀色の髪の子と友人だったとは……」
力なく言う院長にナテアは目を向ける。

「今日会ったのは偶然だったんだけどね。本当はずっと会えないんじゃないかと思っていて、だから偶然でもクラウドとヴィーと3人一緒に会えたことがすごく嬉しいです！」

破顔するナテアを見た院長は釣られたように微笑み返した。しかし一方では眉を寄せて何かに苦悶する様子だ。高齡のために皮膚に現れる皺のおかげで眉間の皺には気付かれなかったが。

「準備はしたけどさー、院長はいなかったぜー」

突如開かれた扉に、院長を含む3人は一斉に館から出てきたクラウドスに顔を向けた。

「……って、院長ここにいたんですか？ あれ？ 会話の途中だった、のか……？」

「いいや、大丈夫だクラウドス。出ていく前に子供達には会わなくていいのか？」

扉を開けた瞬間、3人の視線を浴びたクラウドスは一瞬動きを止め

たが院長に話しかけられてまた動き始めた。

「はい。また数カ月後に会うわけですし」

そうだな、と言う院長に一礼したクラウドは手に持った荷物を肩にかける。

「それじゃあ私はクラウドを見送ってきます」

「気をつけて行きなさい。……殿下もどうかお気をつけて」

院長はそう言うと言わく立礼をする。

「偶然、……いや運命か」

この孤児院の院長であり、裏の森や丘の下にある町周辺一帯を治めるクレナート領主は徐々に小さくなる3人の後ろ姿を何かと重ねるように見ていた。

院長と別れた3人は町へ行くため、丘を下っていた。草花が広がるその丘に孤児院の方向から声が突然響きわたる。

「クラウドスー！」

子供の高い声はナテア達の足を止めた。

「また帰ってくるよねー？」

3人が振りかえると、院長の周りに集まる子供達が見えた。院長の姿と同様に子供たちの服も畑仕事で汚れているのは遠目でもわかる。

「ああ！ だからお前らもいい子で待つてろよ！」

一生懸命に腕を振る子供たちにクラウドも大きく振り返した。

町に着いたナテア達はひと息をつくため、足を止めていた。食堂や宿以外にも出店や屋台などが見受けられ、道では行き交う人の子供たちが走り回っている。全体的にこの町はいつも賑やかな声で溢れていた。

「さ、町に着いたし、馬でも借りてこないとな」

王都に行くまでの手段は馬か馬車が一般的だ。中には徒歩という

人間もいるが、時間が掛かるうえに危険なのでほとんどいない。

町に着く前、髪を隠すようにフードを深くかぶったヴィルフリートがある提案をする。

「……馬なら俺が連れてきたのをやってもいいが」

「は？ ……いや、さすがに駄目だろ。王子の馬を借りるとか」

そう言うクライスを見ながらナテアは苦笑いし、同意するように頷いた。ヴィルフリートの中ではクラウドとナテアは友人かもしれないが違う人間、特に王子だと知っている人間からすれば2人はただの平民なのだから。

「いや、大丈夫だろう。ここに来る前に寄った街で荷物を乗せるために連れてきた馬だからな。その荷物も今はほとんどないし、まだ他にも何頭かいる。だから心配はないはずだ」

ナテアとクラウドの考えが分かったヴィルフリートは肩をあげながら理由を説明する。

「本当か？！ あー、でもなあ……」

独り言を言いながら悩む。だがヴィーの馬を貰えば手間も金も掛からないということが大きかったらしい。結局クラウドはヴィルフリートの案を受けた。

「それなら今から俺が滞在している宿に行くか」

ナテアとクラウドはフード姿のヴィルフリートについて馬を預けている宿へと向かうことになった。

花売りの少女

天気の良い日にヴィルフリートのフード姿は少し目立っていたかもしれない。すれ違う人の中にはちらりとナテア達を横眼で見る者がいた。だが先日 of 王族訪問のため、普段よりもかなり多くの人間が町へ訪れていた so で見方によれば旅人のように見える姿に、それほど不審には思われていなかった。加え、町の人々の関心は違う方向へと向けられていたため、ナテア達は注目を浴びずに進むことができた。

「おはなー、お花はどうですかー？」

昼の町では小さな子供からお年寄りまで、色々な人間が働いている。自分の店を構える者もいれば露店を開く者、それぞれだ。

そんな中、人々が歩く道の真ん中で声をあげる少女がいた。年は10にならない位の少女は手に花の入った大きなごを持ち、道行く人々に声を掛けている。見向きもしない人、にこやかに花を買う人、様々な人が少女の横を通っていく。

「そこの遅しそうなお兄さん達、お花はどうですか？」

ナテア達が花売りの少女の脇を通ろうとした時、その少女はクラウスとヴィルフリートに話しかけた。

一瞬自分たちのことだと思わなかった2人だが、周りには少女の言う「お兄さん」らしき人間はいなかった。日中、若い男性達は町の周囲にある畑で働いている者が多いからだ。にぎわう町中にはもちろん男性もいるが女性の方が目立っていた。

「きれいな花だな。まあ、でも俺らみたいな男には合わないから遠慮しとくよ」

クラウドが申し訳なさそうに断りの言葉を告げる。孤児院で子供たちに接する時のように腰を曲げ、少女の目線に合わせた。

「悪いな」

フードを深くかぶったままのヴィルフリートもクラウドの言葉に同意するように頷いた。

「ふふっ」

花売りの少女はクラウドとヴィルフリートの返事を聞くと落胆するどころか、おかしそうに笑いだした。

2人に比べれば背丈が腰の辺りまでしかない少女は花の入ったかごを両腕で抱きかかえる。突然笑い出した少女に2人は首を傾げた。「違いますよ」

少女はクラウドたちの反応を見るとさらに肩を揺らす。

「確かにお花はどうですか、って聞いたんですけどそれは『お兄さん』達に向かってじゃないですよ」

少女の言葉に2人はますます傾げる。

「だが君は私たちに声を掛けただろう？」

深く被ったフードのため、表情は確認できないが声色から少女を訝しげに感じていることが分かる。ヴィルフリートとクラウドの後ろにいたナテアはフードの下から顔を覗こうと前に回り込んだ。

「はい。きつと似合いますよ、お花。『お姉さん』に！」

「えっ、わ、私？」

突然、話を振られたナテアはびくり、と体を動かす。

「あー、なるほどな。そういうことか」

納得したように頷くクラウドに少女は「そういうことです」と花かごを持ち上げた。

「じゃあ俺はこれ」

「それでは、私はこれだ」

それぞれ1本ずつ花をとると少女に手渡した。ナテアは話について行けず、ただ3人のやり取りを見やる。

「へへっ、まいどあります！」

花の代わりに代金を手にした少女はそのお金を大事そうに服の中へと仕舞い込んだ。すぐに背を向けて次の客を探しに行くかと思われたが、少女は「そうだ」と何か思い出したように声をあげ、花を買った2人を見上げる。

「忘れるところだった。お兄さん、ちょっとお花いいですか？」

少女はそういうとヴィルフリートとクラウスの返事も聞かず、花かごを持っていない方の手を今買われたばかりの花へとかざした。

少女の指には深い緑の小さな指輪。日に焼け、所々切り傷のある手に少し不格好な形をした石の指輪があった。その手を花に近づけると石が光り出した。まるで石の中から溢れだすように見えた光を2本の花に当てると少女は満足げに笑った。

「これで何日かは大丈夫です。もともと、まだ咲き出したばかりだし、きちんとお水とかあげれば長い間咲いてくれるはずですよ」

「わざわざ魔術をかけてくれたのか。ありがとうな」

クラウスの言葉に「いいえ」と首を振り、軽くお辞儀をした少女はナテア達に背を向けた。

「ん」

クラウスが手に持っていた花をナテアの前につき出す。言葉はなく、突然のクラウスの行動にナテアは大きく瞬きをした。ヴィルフリートはぶっきら棒なクラウスをあきれたように見ながら同じように花を出す。

「まだ咲き始めの花だが香りは良いし、何よりきつとナテアに似合う」

2人がナテアに差し出したのは小さな桃色の花弁を持つ花。どこかで栽培しているのか、このあたりでは見かけない花は真っ直ぐに

伸びていた。

「……2人とも、私に？……かわいい」

目を引くような大輪の花ではなく、強すぎる香りを持つ花でもなくどこか控えめな花。しかし小さくとも直線に伸びた花はどこか気品があり、またナテアがよく知る孤児院の周囲に咲く野花のように生命力に溢れていた。

小さく開いた蕾から甘い匂いがする。ナテアは手に取った2本の花に顔を近づけるとその香りを堪能した。

「……ありがとう」

顔を上げてクラウスとヴィーに礼を述べる。目線を横にずらしたクラウスとフードの下で口元を緩めるヴィルフリートの姿。3人そろって森の泉へ遊びに来ていた頃、今と似たようなことがあった。ナテアはまだ幼かったころの記憶を思い出し、目を細め顔を綻ばせた。

「……きやあつ！」

突然聞こえてきたのは女性の悲鳴。それに続くように何かが壊れる音が響いた。

花売りの少女から花を買ったナテア達は町の道端に立っていた。聞こえてきた喧騒はその道沿いからのようだ。辺りの人間はざわざわと、そして同一のある方向を見ていた。

ナテアが人々の隙間から覗くと、道の真ん中で何かが起こっていた。女性の叫び声が聞こえた後すぐに、3人は女性の元へと向った。「……ひどい」

人々をかき分けるように進む2人の後ろをついていったナテアは悲鳴の原因を見ると顔をゆがめた。

壊れた屋台に、果物屋だったのか周りには果物が散乱している。

つぶれた果物から漂う甘い香りと土、埃が混ざった匂いが周囲を包んでいる。そして1人の女性が崩れた屋台の横で震えながら倒れていた。

「す、すみません……」

倒れたまま言う女性の声は恐怖で震えているのがはっきりと分かる。しかし女性が1人で怯えているというのに周りの人間は誰も助けに行こうとはしなかった。

「腐ったやつを売っておいて、謝るだけで許してもらえんと思ってんのか？ あ？」

「ほ、本当にすみま、せん……」

女性の周りには身なりは悪いが体格の良い数人の男たちがいた。長い髪の毛は手入れされておらず、汚れた服や体は悪臭を放っている。所々抜けた歯が滑舌を悪くしており、しかしそれがより女性をこわがらせる原因でもあった。町人たちの注目を集めていた彼らはにやにやと下劣な目で女性を見下ろしていた。

ナテアは足元に転がる果物を拾う。土汚れと小さな傷はあるがそれ以外は何の問題もない。ナテアの手の中にある果物は洗えばおいしく食べられるだろう。そのほか、落ちている果物も見ただけでは痛んでなどなかった。

……ただの嫌がらせか。ナテアは2本の花と一緒に果物を握り締めた。

女性を囲む男たちは町の人間ではない。町の外、森にすむ奴らだった。町の人間からは山賊、なんて呼ばれている彼らは時折こうやって町へ来ることもある。町には町民の男性達なる自警団が存在する。国が直接組織する騎士団よりは劣るが、それでも町人にとっては頼もしい存在だった。

今回は先日の王族訪問が終わり、自警団の気が緩んだ隙に男たち

が町中へ入りこんだのだろう。普通ならすでに自警団が到着しているか、まず町中にいれることはないからだ。

「かわいそうに、まだ自警団は来ないのかしら……」

周りにいる人間の声にナテアは周囲に目をやった。やじ馬で人が大勢いたのが、今では少数だ。多くの人は自分に被害が及ばないように家に帰っていた。助けたいとは思っても誰も手を差し伸べない。だがナテアも女性を助けたいとは思っていたが踏み出せず、自身に苛立ちを覚えていた。

ナテアは手のひらに爪が食い込むほど強く握りしめた。強く握ったため、持っていた花の茎が少し曲がり、果物には爪が食い込む。あわてたナテアは力を緩めた。

「くそっ……」

ぎりり、と歯が軋む音がする。ナテアの前にいるクラウドは眉間に皺をよせ、男たちを睨みつけていた。

ヴィルフリートも表情こそ伺えないものの、ナテアと同じように強くこぶしを作っていた。顔を見なくとも、フードの中はクラウドと同様の表情になっていることが伺える。

しかし女性の周りを囲む男たちと、数少なくなっではいるがちらほらいる町人、女性やお年寄り達がいるために身動きが取れなかった。むやみに飛びだせば、何かしらの被害が出る。

「謝って済むとも思っのか？ こっちやあ被害者なんだぜ？」

下を向き震える女性と、恐れて何も言えない周りに集う町民たちに気を良くし、男たちは下卑^{げび}た声で「ぎやはは」と笑う。彼らの中の1人が倒れたままの女性にずい、と近づいた。

「許してほしいなら、体で償うか？ ……俺たち全員をよ！」

女性の顔が無理やり上げられる。抜けた歯の隙間から男の唾が掛かり、女性は耐えるように目を閉じて顔をしかめ、掴まれた顎と口

から「くう」と息の抜ける音がした。男たちの笑い声と共に、ぐちゃりと果物が踏みつぶされた。

その場にいた少ない町人たちは目線だけを辺りに巡らす。まだ自警団は到着しない。

「やめて！」

か細く、それでも意思のこもった声が響いたのは男たちが女性に唾をまきちらしながら笑っているときだった。聞こえてきた子供の声に女性が閉じた目を薄く開ける。

「あの子……」

声の主に顔を向けたナテアは小さくつぶやいた。

「なんだあ？ 『やめて』って言ったのか？」

突然の声に一瞬笑うことを止めたが、その声を発した人間が分かれると男たちはさらに大声をあげた。

「や、やめてよ！ ママに悪いことしないで！」

花かごを持った小さな少女は言いながら男たちと、男たちに囲まれて倒れている女性の元へ歩み寄る。張りあげる声とは裏腹に、少女の細い腕と脚は震えていた。

「駄目よ！ あっちへ行つていなさい！」

それまで怯えた声しか発さなかった女性が大声で叫んだ。少女に「ママ」と呼ばれた女性は今も顎を掴まれたままだったが、目は大きく見開いており、少女に強い視線を送っている。

「ほおら、『ママ』もそう言ってるぜ？ 餓鬼はすつこんで

る」

「ひ、ひう……」

自分よりも数倍大きな男たちにすこまれた少女はへなへなと腰を地面に落とす。震えたままの手は土の上に置かれた。

「おい、そろそろ準備しろ。長居すると面倒なことになる」

男たちの中から誰ともなくそう言う声が聞こえる。そうだな、と言いいう彼らは互いに目配せをしている。そして町中で盗ってきたと思われる品物を各々担ぎ、逃げる準備を始めた。腰が抜けたのか、座り込んだままの少女はナテアや町人たちよりも間近でその様子を見ながらも、男たちに囲まれていて母親から目を離さなかった。そんな少女に気がついた男たちの1人がにやりと笑う。

「安心しな、年増の女には用はねえかな。……ここにいたのが数年後のお嬢ちゃんだったら相手してやつてもよかったんだぜえ？」

ほらよ、と男が女性を無理やり立たせ、少女に向かって押し出した。恐怖でふらつく体で女性は少女の元へと行く。

「ママ！」

「大丈夫よ、だいじょうぶ」

抱きしめ合う親子を見て、周りにいた町人たちはほつと息を吐く。その間に女性に無礼を働いた男たちは逃げだす準備が終わったようだ。

「何をやっているんだお前ら！」

少し離れた所から男性の声が響く。声は1人ではなく複数で、中には蹄の音も混ざっていた。

「やつとお出ましか。行くぞ！ 十分に引きつける！」

男たちは事前に計画していたかのように数組に分かれ、逃げる。今までに逃げ出す時間は十分にあったが、わざと町の自警団が現れてから動き出したかのようにだった。

崩れた屋台の周りにはすでに男たちはおらず、まだ少女と母親が抱き合っていた。

「つくそ、遅いんだよ」

クラウドは自分たちの目の前を通り、さっきまでいた男たちを追いかける自警団を睨みつける。だがクラウドの怒りは自警団だけに向けられたものではなかった。

険しい顔のクラウドスの横でナテアがぼつりと呟く。

「……できなかった。なにも、できなかった」

ナテアの言葉にクラウドスとヴィルフリートは顔を伏せる。

「俺だつて助けに行けなかった。誰かを守るために騎士として訓練してきたのに……！」

そうつクラウドスは自分自身への怒りで顔を歪ませ、自責の念を隠さない。

クラウドスは数年前に王都の騎士団へ入団してからほぼ毎日、訓練を重ねてきた。平民の、しかも孤児院出身である彼は始め、騎士としての訓練を受けることはできなかった。騎士団での雑用、住み込みの寮の掃除や洗濯、馬の世話、時には先輩騎士や貴族出の同年代の人間からひどい扱いを受けたこともある。

クラウドスが今までやってこれたのは「守りたいもの」があつたからで、ようやく武術や魔術の基礎を習得することができたのだ。だが、それも騎士団の中の話であり、実際に戦ったことはなかった。

「俺もだ。……俺も見ていることしかできなかった。もしあの時、俺がこのフードを外していたら何か変つていたかもしれない」

「それは！ 確かに事が収まるかもしれないけど、ヴィーが危険にさらされるじゃん！」

ヴィルフリートの言葉にナテアが声をあげる。

「だが少なくとも、あの少女は恐怖で震えなくてすんだはずだ」

「そ、それは……」

肯定も否定もできずに口ごもる。3人は町人たちに囲まれる少女と母親を見つめた。先ほどまで怯えていた少女の顔は母親の胸の中で笑顔に輝いていた。

情けない、とナテアは唇を噛んだ。自分よりも年下の少女が震えながらも男たちに向かっていったというのに。 だがしかし過

去は悔みはできても変えることはできない。

「……強く、なりたい……」

それは3人の誰の言葉なのか。ざわめき出した町中で、ナテアたち以外にその言葉を聞く人間はいなかった。

小さな勇者

留学、というものはただの厄介払いだった。名目は他国との友好関係を築くため、幅広い知識に触れるため、などが上げられた。しかしそれは表向きの理由だ。実際は俺を良く思っていない兄たちが計画し、進言したのだろう。母である王妃に。

直系の王族特有の銀髪。2人の兄がくすんだ銀髪であるのに対し、俺や妹は父王と同じ透けるような銀髪だった。今思えば、兄たちの態度は髪色に対する嫉妬だったのだろう。それでもまだ子供だった俺にとって、ひとりで留学することよりも、兄たちにそこまで嫌われている、というのがつらかった。

それに俺たち4人の実母であるはずの王妃は兄たちには優しく、なぜか俺にはほとんど口さえ聞こうとはしなかった。だから本当は望みもしない留学を、自分が逃げるために利用したのだ。

成長したと思っていた。

名しか知らなかった国で、周りにはほとんど供もない状態で生きてきた、というだけで。

「……目の前の人間すら守れないとは」

強くなる。

たとえば王にはなくなるとも、ここは自分の守るべき国なのだから。

+ + + +

先ほどまで静かだった町中はざわめきを取り戻しつつある。山賊たちがヴィルデの町から逃げ出した後、ようやく来た自警団たちや屋内へ逃げ込んでいた住人たちが外へ出てきたからだ。

普段よりも多くの喧騒が飛び交う中、山賊たちの被害者であった女性は、娘である花売りの少女と共に町の女性たちに囲まれていた。けがの手当てか、女性はゆっくりと背中を押されながらすぐ近くの民家へと入っていった。

残った女性たちや、自警団たち数人が壊れた屋台の後片付けをしている。売り物だったはずの果物はほとんどが土で汚れ、踏みつぶされたものも数多くあった。

「俺たちも手伝います」

自然と、ナテア達3人もその中に入ってしまった。

「あ、これもまだ大丈夫ね」

ナテアは言いながら地面に落ちていた果物を拾う。先ほどの騒ぎでつぶれたりしたものがほとんどだが、それでも無事なものもいくつか残っているのだ。ナテアは着ているワンピースの裾を持ち上げ、その中に果物を入れていった。ワンピースの下には長ズボンを履いているため素足は見えない。両手では持ち切れそうにないほどの果物を拾ったナテアは、そのひとつを自分の服にこすりつけ、土を軽く払った。

「あら、結構拾ったね！ それじゃあこっちへ持ってきてもらおうか。これから水で洗い流すからね」

ナテアに声をかけたのは恰幅の良いおばさんだった。彼女は周りにいる女性たちにも次々と呼びかける。その大きな声でナテアと同じように、ワンピースやエプロンをかご代わりにして果物を拾っていた女性たちが集まってきた。

「思ったよりもたくさん残ってよかったわ」

「少し傷がついてるけど大丈夫よね」

用意された木の箱に果物を入れていく。洗うために近くの井戸か

らたつぷりの水も木の箱の周りに置かれていた。

「おい、何やってんだ？」

「クラウドス？……ああ、ちよつと休憩中」

声を上げ、女性たちをまとめていたおばさんを中心に、数人の女性たちが丁寧な汚れを落としていく。あまり大勢でも邪魔になるだろうと思ったナテアは、休憩もかねて壁に寄りかかりながら女性たちの様子を眺めていた。

ナテアの視線を辿ったクラウドスは果物を洗う女性たちを見ると「なるほどな」と頷いた。

「……そっちは？ 終わったの？」

ナテアは自分と同じように壁に寄りかかるクラウドスを見上げる。

クラウドスは孤児院を出てきた時よりも少しだけ汚れた服で汗を拭っていた。

「ほとんどな。ヴィーも、もう来るんじゃないか？」

落ちた果物を拾ったり、被害者の女性を手当てしている女性たちとは別に、自警団を中心とした男性たちは壊れた屋台や、散らばった木片を片づけていた。しかしそれもほとんど終わったようだ。

「クラウドス、もういいそうだ」

壁に立ち並んでいた2人にヴィーが近づきながら話しかける。途中、ナテア達の方へと向かうヴィルフリートに対して「おつかれ！」と声をかける男性が何人かいた。

ヴィルフリートはクラウドスと同じように服が若干汚れているようだが、目深にかぶったフードは町に来た時から変わらない。初めは少しばかり不審に見られはしたものの、積極的に折れた木材を運ぶなどの姿に、最終的には町の男たちとまるで仲間のようにつながっていた。

「これからどうするの？」

だいぶ落ち着きはしたが、まだ町の外には残党が残っているかもしれない。そのため、町中は安全だが外が今現在どうなっているかわからなかった。

「そう、だな。この状態じゃあ今はまだ出られない感じだな。まあ、少し遅れても馬でとせば大丈夫だろ」

外に出たとして、もしかしたら自警団から山賊と間違えられるかもしれない。間違えられるだけならいいが、集団で攻撃をされる可能性も少なくはないのだ。

「クラウドはまだしばらくここにしていると、ナテアはどうするんだ？」

クラウドを見送るために来たナテアは特に町にとどまる理由はなかった。ナテアは被害者の女性と娘の花売りの少女にひと言声をかけたいと思っていたが、まだ手当てが終わっていないのか、外に出てくる気配はないようだ。

「うん……。一度、孤児院に帰ろうと思う。報告とか、まだいってないと思うし」

この辺り一帯、クレナート領の領主である院長に今起こった出来事を伝えなければならぬのだ。普段なら自警団の人間がその役目を果たすのだが、このままだったら今日の夕方辺りになるかもしれない。

逃げた山賊たちを追いかけに行った多くの団員達がまだ帰っていない様子から、ナテアは昇りきった太陽を眩しそうに手をかざし、見上げながら呟いた。

「ヴィル様……！ やつとみつけましたよ！」

ナテア達がこれからのことを話していた時、ナテア達の方へ歩いてくる若い男性がいた。顔立ちなどから年はナテア達よりもいくつか上だろうと思われる。額を濡らす汗と少しばかり荒げた息の男性はヴィルフリートを見ると安心したように大きく息を吐いた。

「なんだ、ジーンか。丁度いい、今から向かうところだった」

「は、はあ……、あなたという人は。町が騒ぎになっていると聞いて、俺がどれだけ心配したと思っているんですか」

ヴィルフリートの言葉にジーンと呼ばれた男性はがっくりとうなだれる。しかし、すぐに立ち直ったジーンは次に、ヴィルフリートと共にいるナテアとクラウドスに視線を移した。態度には表さないが、その視線は2人を訝しげに見ている。それに気がついたヴィルフリートが紹介のために口を開く。

「ジーン、この2人がナテアとクラウドスだ」

「ナテア、クラウドス……？ ああ！ 会うことができたんですね」
「どうやらナテアとクラウドスのことを知っているらしいジーンに、今度はナテア達が説明を求めるような目でヴィーを見た。」

「ヴィー？ ……ええと、どうということ？」

首を傾げるナテアに「申し遅れました」とジーンが1歩前に出る。
「ヴェル様の侍従をしております、ジーン・ヘリンソンと申します」
そう言い、腰を折るジーンにつられて、ナテアとクラウドスも小さく頭を下げる。

「ジーンは俺の兄のような存在だ。2人のことももちろん知っている」

「それはもう……、なんども、聞かされましたからね」

なんども、ジーンは意地悪そうな顔で強調する。

「……ふん」

ヴィルフリートはそんなジーンの言葉が気に食わなかったのか、顔を逸らし鼻を鳴らした。

ヴィルフリートとジーンの上下関係は互いの言葉づかいで把握できるが、それ以外では友人のようにも見える。

ジーンは侍従、と言っていたが王子であるヴィルフリートに対しての態度が所々、親しい友人といえるかのように接していた。

「くすっ」

ナテアは3人に聞こえない程度で笑みを漏らした。ヴィルフリートとほとんど変わらない身長のカラウスやその2人よりも頭半分ほど高いジーンには気づくことのできないものを見たからだ。

ヴィルフリートが銀髪を隠すため、ヴィルデの町中でずっと被っているフード。離れた場所やヴィルフリートと同じ視線だったら独特の髪だけではなく、顔の表情も伺うことはできないだろう。その照れたように赤くなった顔も。

身長差で下から見上げるナテアだけが気付いた変化。ナテアはヴィルフリートと久しぶりに再会して初めは随分と変わってしまったと思っていた。背丈や物腰、言葉づかいを含めた多くのものが。だが、変わってないものもあったのだ。

「っジーン、馬をかりる。2頭連れてこい」

ごほん、と咳をしたヴィルフリートはジーンに命をだす。まるで照れ隠しのようなその仕草にジーンは一瞬ニヤリと笑ったが、すぐに表情を戻した。

「馬を？ どうなさるのですか？」

ヴィルフリートたちが王都へ帰る予定は今日ではなかった。ジーンのもつともな問いにヴィルフリートは「カラウスに貸すのだ」と話す。

「そうのですか。それでは今から連れてまいりますのでお待ちください」

なるほど、と頷くとジーンは礼をして足早に立ち去り、普段の活発さを取り戻しつつある町の人ごみに消えていった。

「にしても、」

ジーンが立ち去った後、それまでほとんど黙っていたクラウドスがジーンの向かった方向に目をやりながら口を開いた。

「ヴィー、本当に偉かったんだな」

クラウドスは「はー」と息を吐きながら改めて確認する。ヴィルフリート自体は目立たないようにしているからか、見た目だけならば服装などはナテアやクラウドスと変わらない。

しかし今いた、ヴィル様の従者、であるジーンの姿はナテア達とは違い、まるで貴族のような身なりであった。豪奢ではないが見ただけで質の良い服はそれだけで、ヴィルフリートとジーンの主従関係を間違えそうなほどに。

「……本当に、とはなんだ。本当にとは」

ヴィルフリアートの少しふてくされた声に、クラウドスが「悪い、悪い」と笑う。2人のやりとりにナテアは小さく微笑んでいると、賑やかに町人たちが行き交う町中でひと際ざわり、とするのが聞こえた。

「なんだろ……？」

ナテアはざわめきの元となっている方向へと視線を向ける。

また山賊か？　とも思われたが、どうやら違うようだ。3人が耳を澄ませば「よかったねえ」と言いあう人々の声が聞こえてくる。

「あの子」

ざわめきの中にいる親子をみると、ナテアはぼつりと呟いた。そ

の親子は町中へ入りこんだ山賊たちに被害を受けた親子だった。

母親の方は顔や手に手当てをした跡がある。体を庇うように歩く様子から腹や背中など、服で見えない部分も怪我をしているだろう女性は、娘と並んで今まで治療を受けていた家から出てきた。

女性の無事を確認すると3人はほつと息をついた。それでも女性の傷を見ると何もできなかった自分に後悔してしまう。ナテア達が内心、やり切れない気持ちでその様子を見てみると、母親の隣にいた少女が「あ！」と声をあげた。

「さっきの……！ お兄さんたち！」

少女がナテア達の方を見たと思うと、ぱたぱたと走り寄ってきた。「……わっ、走ると危ないよ」

ナテアは走った勢いが強すぎてよろめきながら立ち止まる少女を抱きとめる。ごめんなさい、と素直に顔をあげて謝る少女には怪我の跡はなかった。

「頑張ったな」

ナテアの腰に抱きついた形の少女の頭をクラウドが撫でる。山賊に立ち向かった勇気を称えるその言葉に、少女はぱちぱちと瞬きをする誇らしげに頷いた。

「うん！ だつてママだから！」

「お母さんのこと大好きなんだね」

ナテアがそう言うのと少女は笑顔で返す。本当に好きなのだろう、その気持ちで少女に勇気を与えたのだ。

「でも後でママに怒られちゃったんです」

えへへ、と少女は母親に怒られたと口では言っているが、後悔している様子ではなかった。まるで自分のことを勇者のように話し、けれども本当は怖かったのだと続けた。

ヴィーが少女に近づき、少しだけ腰を折る。

「きつと母君は怪我でもないかと心配でなかったのだ。分かるだろう?」

少女の母親の立場なら、少女が山賊たちの前に出てきたときはどのような気持ちだったのだろう。きつと生きた心地はしなかったはずだ。少女は無言で頷くと、ヴィルフリートの方へ顔をあげた。

「……おうじさま?」

ぼつり、と少女の口から出た言葉に3人が一瞬で体を固まらせる。少女は腰を折った状態のヴィルフリアートの顔を覗きこみこんだまま、首を傾げた。

まさか、ばれてしまったのかという同様に隠しながらナテアが聞いた。

「ど、どうして? どうして王子様って思っの?」

偶然出た言葉だとはしても、もしかしたら、とナテアの声はかすかに震える。

同様に、ヴィルフリートとクラウドの息を飲む音も聞こえた気がした……しかし。

しかし、少女の答えは3人の考えとは遥かに違うものであった。

「物語のおうじさまみたいだったから! おにいさん、すっごくきれい!」

「え……」

「つぶ!」

口を開けてぽかんとするナテアと吹きだしたクラウドに対し、ヴィルフリートは口端を引きつらせた。

そんな3人の様子など気にかけるでもない少女は、続けて思った事を口にする。

「おねえさん、おねえさんはどっちなんですか？」

少女はナテアの服の裾を引っ張り、近づけた耳元で内緒話をするときのような小声で聞いてきた。

「え、何が？」

王子発言は少女の勘違いであったことでほっとしながら、ナテアも少女と同じく小声で聞き返す。

「恋人です。どっちのおにいさん？」

こいびと、コイビト、恋人……。

ナテアは少女の言葉を頭の中で反芻させる。そして少女の言葉の意味を理解すると急激に顔を赤らめた。

「へっ?! な、なな何？」

予想外の質問にナテアは大声をあげる。だが、動転しているナテアはそれどころではなかった。

「恋人、じゃないんですか？」

なおも続く言葉にナテアの顔は真っ赤になり、口はぱくぱくとするばかりだ。

「なにしてるの、早く来なさいっ」

少し離れた場所から少女を呼ぶ母親の声が響く。はい、と返すと少女はナテアに言った。

「早くしないと盗られちゃいますよ？」

「なっ……!」

小さく笑う少女にナテアは再度顔を赤らめる。

少女はというと、「頑張ってください」と手を振りながら母親の元へと戻っていった。

風の声

「……んもー」

ナテアは赤らんだ頬に手を当てながら、走り去る花売りの少女を見送る。先ほどは少女が突然言い出した言葉にどきりとさせられたが、やはりまだ子供だった。

少女が町の通りに立っている母親に抱きつくと、その様子に周りの大人たちは笑った。つい数時間前までヴィルデの町は剣呑な様子であったが、今ではそれが嘘のようだ。騒ぎを聞きつけて普段より早めに畑から帰ってきた男性たちや、行き交う人々を招き入れるために声をあげる商人たち、エプロンをつけたまま話しこむ女性たちの周りでは子供たちが走り回っていた。

ナテアの所にまで届いた笑い声も町を彩る飾りのように溶け込んだ。

「……なんだ？ 何話してたんだ？」

少女とナテアの小声でのやり取りはクラウドとヴィルフリートには聞こえていなかった。クラウドは未だにほんのりと頬の上気したナテアに尋ねる。

「な、なんでも。何でもないっ」

言葉では言うが、まったくもってそういう風には見えない。

首と手を振り、あわてた様子のナテアにクラウドとヴィルフリートは顔を見合わせる。

「……ナテア？」

「わっ！」

突然目の前に現れたヴィルフリートに、ナテアはつい大声をだしてしまった。しまった、と手のひらで口を押さえるとすぐに謝りの

言葉を告げる。

「う、めん……。いきなりでびっくりしたから」

「い、いや、大丈夫だ。だがどうした？」

純粹にナテアを心配しているであろうヴィルフリートの顔を見ると、先ほどまでいた少女の言葉を思い出した。

『どちらが恋人ですか？』

「いやいやいやいや。ありえないよ」

そう、絶対にありえないことなのだ。今ナテアの目の前にいるヴィルフリートはこの国の王子という立場。加えて、年頃の女性なら一瞬で見惚れてしまいそうな整った顔。想像しなくとも、ヴィルフリートが王都へ帰れば国中の貴族のご令嬢達が放っておかないだろう。

「何ぶつぶつ言ってたんだ……？ 変な奴だな」

奇妙なものを見るような目を向けてくるクラウドにナテアは頬を膨らませ、わざと怒った顔を見せる。

「なによ、変って」

長い時間を家族のように過ごしてきたクラウドとは兄弟、友人のようであった。王都へと騎士見習いとして町を出たクラウドだが休暇には戻ってくるし、こうやってふざけ合ったりもする。だが、それだけだった。

ナテアにとってクラウドは愛すべき家族で、それ以上の感情はないはずなのだ。

ただここ最近、たまに帰ってくるクラウドは見るたびに変わっていく。騎士としての訓練を受け、見える所ばかりではなくて、内面も成長しているのだろう。

「はあ……」

ナテアは地面に視線を移す。

数年ぶりに再会したヴィルフリートもそうだ。ナテアの記憶にあるヴィルフリートは大人しくて弱虫な友人だった。それが今見る限りでは、まったく言っていないほど変わっている。

「どうしたんだ？」

「さあ……？」

頭上から聞こえてくる会話に、ナテアは顔をあげた。

いつの間になつていた見上げなければならいほどの身長差。見える景色も違うのだと思うと、ナテアにとってこの数年間の変化は戸惑うことしかできなかった。

「私もう行くね。クラウド、時間があつたらまた孤児院に来るでしょ？ ヴィーも町を出るときには声かけてくれると嬉しい」

今日は会えてよかった、と付け加えるとナテアは孤児院に戻るため町の通りへと走り出た。

「あつ！ おい、ナテア！」

「クラウドさ、今度帰ってくるときは砂糖菓子、買ってきてね！」

町の人々の声で徐々に聞こえなくなる声。ナテアは2人に向けて大きく腕を振った。

「またねっ」

最後にそう小さく聞こえたかと思えば、ナテアの姿は町中に消えていた。

+ + +

町のにぎわいは背後に、辺りには畑があるがそこで働いているは

ずの人間はいなかった。日中、畑で働いている人間や町の周辺を警備している自警団は数時間前に起こった事件で町へ戻っていたからだ。

「はっ、はっ、はっ」

普段であつたならば休憩で畑の隅に腰を下ろし、雑談したり昼飯を食べている人々がいたはずだった。

しかしナテアは特に気にするわけでもなく、誰もいない畑の先にある丘とその丘の上にある孤児院へ向かつて走っていた。

「はっ、はっ……、せっかく、会えたのに。なに、やってんだろ、私」

畑を過ぎ、丘の道の途中で徐々に速度を緩め、ついには足を止める。立ち止まると、ナテアは息を整えながら呟いた。

町から孤児院のある丘は目で見る限りでは遠くはない。が、緩やかとはいえ上り坂の続く道はきついものがあつた。

ぽたり、とナテアの額から汗が落ちる。日差しが強く、乾いた地面の上に落ちた汗はすぐにしみ込んでいく。

額に浮かぶ汗を一度袖で拭くと、ナテアは今走ってきた方向を振り返った。

ナテアのいる場所はヴィルデの町と孤児院との中腹。周囲には収穫前の作物が植えてある畑がある。そして緑の茂る先には先ほどまでいた町が見渡せた。

大きいとも、都会とも、美しいとも言えない小さな町。それでもこの小さな町がナテアの全てだった。

町を囲む緑豊かな森や泉や小川、種類豊富な動物たちは故郷を思い出させた。幼いころの記憶は断片的になってしまったものもあるが、ほとんどは目をつぶれば思い出すことができる。

「ふう……」

ナテアは町を見下ろしながら胸に手をおいた。いつかは好きな人ができて、結婚して、子供を産んで……、そう考えることもあるが『いつか』の話だ。今はまだこの丘の上で院長たちや幼い子供たちに囲まれて、という生活が続くと思っているし、ナテア自身がそれを望んでいた。

（このまま、このままがいいの……）

ナテアはずっと、とまでは言わないができるならば今の暮らしが続いてほしかった。

突然、握りしめた手を胸に置いたまま立っていると森の方から風が吹いた。

「きゃっ！」

緩やかに流れていた風の急な変化にナテアは目を細める。結んでいた髪は紐がほどけてしまったために宙に舞い上がった。

森からたまに強い風が吹いてくることがある。一時的な強風だ。季節や時間帯にもよるが、長い間続くわけではない。ナテアは過ぎ去るのを耐えるように地にしっかりと足をおき、腕を抱き込む。似たような風は何度も経験したことがあった。

「……っ」

しかし今回は思った以上に長かった。動物の甲高い鳴き声のような風の音が轟く。

丘の中腹にいるナテアの周りには風をさえぎる物は何もなく、また、目を開けることも呼吸をすることもままならない。直に当たり続ける強風は時に痛みをも感じさせた。

肌を切るような感覚に耐えかねたナテアは小さく口を開いた。

突然ぴたりと止む風。

ナテアが開いた口を閉じた瞬間、急激に風の威力が落ちた。
舞った金髪が太陽の光を受けながらふわりと背中に広がる。ナテ
アは深呼吸をしながら顔をあげた。

「……びつくりした。あんなに長く、珍しい……」

普段と同じ緩やかな風が草の上をすべる。先ほどの風で乱れた髪
を梳きながら首を傾げた。

周囲の一刻前と変わらない雰囲気、今起こったばかりの強風が
偽りであったかのように感じさせる。しかし森から届いたのである
う大量の木の葉が、木のないはずの畑や丘へと続く道に散乱してい
ることで偽りではないことを示していた。

ナテアは髪についた葉を払い落とす。見上げればすでに見える帰
る場所。

子供たちはあの風に怯えなかっただろうか、怪我でもしなかった
だろうかと思ひながら一歩、足を踏み出した。

途中、振り返ればいつもと変わらない町並み。

「やっぱり後でもう一度町に行ってみよう」

互いに挨拶らしい挨拶がでずに別れてしまった。もしかすると
クラウスはすでに町を出てしまったかもしれない。それでも数年ぶ
りの3人での再会なのだ。あんな形ではなく、笑って別れたかった。

「よし！」

走れば間に合うかもしれない。ナテアはそう思うと地面を蹴って
走り出す。

（怒ってるかな？……でも多分許してくれる）

ごめん、と言えば最初は怒っていても笑って許してくれる2人の
顔が浮かぶ。

緩めた顔を引き締めると丘の上を一気に駆け上がる。

孤児院の周りは風の音と鳥の鳴き声しか聞こえなかった。

丘の上の孤児院

一度、孤児院へ戻って子供たちや院長たちの様子を見てから町へ戻ろうと思った。

今日の風はいつもより強かったし、下の子は泣いていたかもしれない。外にいた子は大丈夫だろうか？ 畑の様子は？

……でもきつと大丈夫。アベルなんかは「へっちゃらだった！」と言いながらもう外に出ているかもしれない。

ああ、でも畑は大丈夫じゃないかも。風の収まった今は院長やエルザさん、みんなで畑へ向かっているに違いない。

+ + + +

「……あと、少し」

ナテアは少し息を荒げながら、孤児院へと足を進めていた。

収まった風がナテアの髪をなびかせる。急いで丘を駆け上がったためか、一筋の汗が首に流れた。それを気にする様子もなく、ほどけた髪もそのままに、ナテアの視線はもう目の前にある孤児院だけを見ていた。

「あ、れ？ どうしたんだろう……」

いつもならば森から吹く緩やかな風に乗って、子供たちの笑い声が聞こえてくるはずだった。

帰りついたナテアはしん、と静まる孤児院を見上げながら小さく呟く。

周囲には先ほどの強風で横倒しになった畑の作物や、同じく風で

散ってしまったらしい野花が確認できる。そして、町から丘、丘から孤児院へと繋がる道、その道先にある孤児院が普段と変わらずにあった。

おかしい、ナテアは顎に手を当てながら辺りに視線を巡らせる。

郊外にある一般的なお屋敷ならこの静けさに違和感を感じなかっただろう。

だがここは孤児院なのだ。たくさんの子供たちが住まうこの場所は、静けさとは程遠く騒がしいと思ってしまうほどの賑やかさであるはずだ。

だが今は

「なんで……？」

子供たちの声は聞こえてこなかった。

ナテアはそつと足を忍ばせ、孤児院の敷地内に入る。手のひらを館の窓に当て、外から室内を伺うが誰もいない。視線はそのままに窓に触れていた手を口にやると眉を寄せる。

孤児院にいる全員がいなくなるということはこれまで一度もなかった。

院長などの大人やナテア、クラウドといった年長組が引率で森や町に行くことはある。だがそれは全員で、ということはなかったし、これからもないはずだった。何人かで町へ行けば、孤児院に子供や大人たちの何人かがかならず残る。それは大勢での移動の大変さなどや、掃除や洗濯といった仕事があるからだ。

非日常の状態に、ナテアは自然と体を緊張させた。

口を閉じたまま外窓から目を凝らして中を見ると、窓沿いに続く廊下の外窓と対面するように並ぶドアの1つが半開きであることに

気が付いた。

「な、に」

子供たちの部屋であるそこは、まるで泥棒でも入ったかのようなありさまだった。

倒れた椅子やばらばらに散らばる本、そして引きちぎられた枕からの綿で床が埋まっていた。

チチチ……、と小鳥がさえずりながら空を飛ぶ。ナテアは小鳥に見向きもせず、壁に背を向けてしゃがみ込んでいた。

「なにが、何が起こってるの？」

ポツリとつぶやかれた言葉に答える者は誰もいない。ただ「何かが起こっている」ということは理解できた。

ナテアは顔をあげると今来た道に目を向ける。下へ、町へ行けば人がいる。だがその間に子供たちが、院長が、エルザさんを含めた人達がどうなるかは分からない。

「……盗賊？」

町で一番大きな館であるから、その考えもある。ヴィルデの町で暴れていた山賊の残党である可能性も高い。

盗まれるだけならいい。だがしかし、万が一のこともある。

壊された屋台に、踏みつぶされた果物、山賊たちの笑い声……。そして震え、怯える母子。最悪の場面がナテアの頭をよぎる。

「やだ……！」

ナテアはそう言いながら顔をゆがめると、壁に手を当てて腰をあげた。

目だけではなく、耳も澄ます。周りに注意を払いながらなるべく音を出さないように、中腰で辺りを探る。

孤児院の壁伝いに歩いたまま行くと、途中で壁が途切れる。直角に曲がる壁からそりと顔をのぞかせ、誰もいないことを確認する。角を曲がると森が見え、遠くには普段家畜を放している場所が見えた。

「外には誰もいないのかな？」

どこよりも慣れた場所なのに、いやに広く感じる。そして、静かすぎるここは少し不気味だった。

息をひそめ、警戒したままだが特に今まで誰とも出会わなかった。ふ、と一瞬だけ緊張の息を吐く。

ぱきっ

「っ……！」

口を両手に当て、壁にぴたりと体を密着させる。足元には思わず踏んでしまった小枝。しかし、ナテアの意識は違う所にあった。

（声が、声が聞こえた？）

初めは踏んでしまった小枝に驚いたが、次に聞こえてきた音はさらにナテアを驚愕させた。

ナテアは重なる驚きのあまりに飛び出しそうになった声を両手でなんとか塞ぎこむ。そして、どくどくどく、と早鐘のなる心臓を押さえこむ。数回、深呼吸をして落ち着きを取り戻すと音の主　孤児院の人間ではない誰かを、体を縮めながら覗きこんだ。

（あれは……？　だれ？）

遠く離れた場所に複数の、背丈や体格から男性と思われる人間たちがいた。孤児院脇の牧草地にいる男たちは町の間人ではないようだ。

孤児院の裏手で、森に面する牧草地であるそこは広々としており、真昼の太陽からの日差しで影となる部分はほとんどない。そのため、遠いとはいっても森育ちで、都会に住む同年代の少女たちよりも優れたナテアの視力と聴力は離れた男たちを、うっすらだが捉えることができた。

離れていても、目を凝らせば男たちの様子は見える。ナテアは孤児院の影から覗くように探りを入れる。

「……盗賊？ 山賊？」

目を細め、男たちの姿をよく見ようと目を凝らす。はつきりとは分からないがある程度は見える。

「でも、あれは……」

賊なんかじゃない、ナテアは呟きながら首を傾げる。

今日、ヴィルデの町でみた山賊たちは、お世辞にも『まとも』な身なりではなかった。ボロボロの服に長くてべたついた髪、顔や体からは何とも言えない臭い……。悪く言えば汚らしい恰好、それがナテアの知る賊であり、実際に町でも見た彼らの姿だ。

しかし、ナテアの視線の先にいる男たちはそうではなかった。ナテアの想像するボロ服を着た山賊や盗賊のような姿ではなく、おそらく清潔であるうと思われる身なりをしている。おそらく、というのはナテア的位置からはつきりと見えるわけではないからだ。

全員が黒いマントを羽織っており、頭の部分までをも隠している。体格で性別は判別できるかもしれないが、年齢などのその他は分からない。

「……なんだか、怖い」

やはり町へ降りた方が良かったかもしれないと、ナテアは自分自

身の軽率な行動に後悔する。

数時間前の山賊たちとの恐怖とはまた違った恐怖。正体不明の不気味な集団は薄気味悪いものがあつた。

「あ……！」

黒マントの集団から視線を奥にやると、小さくうずくまる人達がいた。

立っている男たちとは違い、孤児院のみんなは体を寄せ合うように座り込んでいる。いや、座り込んでいるのは院長やエルザさんたちなどの大人たちだけであつて、子供たちはどうやら意識をなくしているようだ。

倒れた子供たちを庇うように抱きしめるエルザさんたちと、そのエルザさんたちの前で男たちを見上げている院長。院長は何かを訴えながら、みんなの盾になるように前列に座っていた。

（よく、聞こえない）

姿は見えても、はっきりとした声までは届かない。一体どのような状況なのかと、気になったナテアは足を進める。

孤児院の周りを囲むように生える植物に身を隠し、息をひそめながら近づいていく。

「……は、言いがかりではないのか?!」

「をいつ。証拠も」

「誰が……、誰の指示……」

距離が縮まるに従つて、会話の内容も聞こえるようになってきた。なにか揉めるように、院長と男たちの1人が話している。

比較的、聞き取りやすいのは荒げた口調の院長の声。反対に黒マントの男は低く、余裕をもったような話し方なので近づいたといつても、聞こえない部分が多い。

全て、とはいかなくても会話の聞こえる距離だ。もし今、くしゃみなど、音を出せば気づかれる、ナテアはそれくらいの位置にいた。

「さまの、だ」

ごくり、普段よりも速く脈打つ心臓に手を当てながらナテアは唾を飲み込む。院長と男の会話以外、空を飛ぶ鳥の鳴き声しか聞こえてこない。その静けさに、心臓の音や喉を鳴らす音までも聞こえるのではないだろうか。ナテアは冷や汗を流す。

「まさか！」

今までにない院長の声にナテアはびくり、と肩を揺らす。驚いたのはナテアだけではない。院長の声で気が付いたらしい子供たちの数人がのろろと体を起こしていた。

ナテア的位置からは目を見開いた院長の顔が伺える。男たちの姿は背中しか見えないため、どんな表情をしているかは分からない。

「これ以上、どう……！ あの……すでに……」

「は、ない」

何を言っているのかと、身を潜めながらもできるだけ音を拾えるように集中する。……だから、ナテアは気がつかなかった。

黒いマントを羽織った人間はナテアの視界にいるだけではなかった。院長と男の会話だけに意識を寄せたナテアの背後に忍び寄る陰に。

かさり、とナテアのすぐ後ろでした布づれの音。それまで前にしか意識をやっていなかったナテアは音を聞いて瞬時に背後を振り向く。

「きゃっ……！」

振りかざされた黒い影に目をつぶった。

秘密の言葉

ナテアは背後の気配に気づいて振り仰ぐ。その時にはすでに腕を伸ばせば相手に届くほどの距離であった。

一步、ナテアより先に相手の足が踏み出でる。

驚きと、それを上回る動揺でナテアは逃げるどころか動くこともできない。出来ることは伸ばされる手に焦点を当てながらもただばくばくと口をあけることだけだった。

「ナテア！」

孤児院を囲む牧草地に大きく声が響く。声は広々とした空の下ではすぐに拡散され、空へ森へ土へと散らばっていく。しかしその声は、固まったままのナテアを動かすには十分だった。

聞き慣れた声がナテアの耳に届いた。

膝をつき、しゃがんだ状態から少しだけ足に力を加える。

ナテアが後方へ飛び退くのと、腕を伸ばしていた相手の手が空を切るのはほんの数秒差だった。

「……っち」

黒マントの下から発せられた音はナテアよりも随分と低い男性のもの。ナテアに向けられているものは決して味方といえるような気配ではない。

ナテアは警戒心を隠さずにぎろり、と睨み上げる。もし相手がつきりと強面であったり、筋肉隆々だと分かっていたならばこうはいかなかったかもしれない。姿が見えないことで逆に強気に出ることができたのだ。

だが内心は強気というには程遠く、心臓がこれまでにないほどの速さで鳴っていた。

これが自然の中だったならナテアの命はなかっただろう。広範囲

に生息し、たくさんいる小動物より数は少ないが人間よりも素早く、
獰猛である肉食獣が森の中にはいる。普通の人間ならばまず、出会
った時点で逃げ切めることは難しい。森で狩りを行うナテアにとって、
そういう意味で周囲を警戒することは非日常のことではなかった。

ナテアは怯えを隠し、ぎりりと歯を噛む。背中を伝う汗とかすかに
震える指先……それでもナテアの中に「逃げる」という考えは浮
かんではなかった。

「この館にいる者は全員集めたのではないのか？」

突然現れたナテアを見ながら言うのは、それまで院長と対話をし
ていた男だった。「ナテア！」と声をあげた院長には目もくれ
ず、自身の部下に問いかける。

「も、申し訳ありません！ここににいる者で全てだと」

「まあいい。あの娘も連れてこい。……他は誰も入れるな」

男は部下の言葉を最後まで聞かずに次の命を出す。言葉の後半部
分はまるで無言の圧力のように、周囲に立っていた部下たちは小さ
く肩を揺らした。しかし男の命を聞くと、頷いた数人が素早く動き
始める。

その様子を無言で見届けた男は再び院長へと体を向けた。

「私はいいが、……子供たちやナテアに手を出すことは許さん」

普段では絶対に見せない院長の唸り声に子供たちは肩を寄せ合う。
そんな中、不安げに瞳を揺らすアベルをエルザが皺の多い、しかし
温かい手でそっと撫でた。

その他の年老いた大人たちが子供たちを慰めるように抱きしめる。
理由も分からないまま、大人たちも院長の様子を不安げに見つめて
いた。

怒りを隠さない院長に対して、男は余裕を表すかのように「つぶ」

と鼻を鳴らす。

この、いかにも怪しい集団だが囲んでいるのは黒マントの男たちで、囲まれているのは孤児院のみんななのだ。加えて、囲まれている孤児院の人間は子供か、半世紀以上生きてきた大人たちがほとんどで、どちらが有利かは誰にでもわかる。

この状況を打破するのなら、黒マント集団と同数またはそれ以上の自警団の人間が助けにくるのを待つか、もしくは自分たちで何とかするか、だ。

いつ来るかわからない自警団を待つのは得策ではない。残るは、自分たちでなんとかするか、だが、これも現実的ではなかった。

院長を含めた孤児院の大人たちが考えを巡らせていると、その考えが分かるかのように男が小さく肩をすくめる。

「手を出すかどうかは返答による」

「だから先ほど答えたではないか！」

「……私らもむやみに子供たちを傷つけたくはない。貴様ほどの人間ならば、分かるだろう？」

まとわりつくような、わざとらしい言い方に院長は眉を寄せる。黙り込んだ院長に、男はマントの隙間から不適な笑みを見せた。

院長と男の会話が止み、その分だけ静かになる。

震える子供の中には耐えきれずに声を殺しながら涙を流す子が何人もいた。

「あつ」

「どうしたんだい？」

頭を撫で、涙をふき、泣いている子供たちをあやしていたエルザがアベルを見る。

息をのむような声を出したアベルは心配するエルザに反応することなく、何かを見つめていた。アベルもまた、他の子供たちと同じように怯えているものだと思われるがどうやら違うようだ。

今も、男と院長との間で沈黙は続いている。だがアベルが見ているのは緊張の空気をまとった2人ではなかった。

「だめ、だ……」

掠れたような小さな声がアベルから出る。震える声にはかすかだが、なにかを訴える物が含まれていた。

さすがにただの怯えではないと感じたエルザがアベルと同じ方向へ視線を向ける。年のせいで鮮明に捉えることはできなかったが、アベルの言葉の意味を悟った。

「やめろ、……やめろ！」

そう声をあげるとアベルは突然立ち上がった。アベルの急な行動にエルザは驚くことしかできない。息を飲見込んでいるエルザの前でアベルは勢いよく土を蹴った。

「アベル！」

アベルの行為に子供たちや大人たち、院長までもが驚きの声をあげる。エルザが名前を呼んだときにはすでにアベルは手の届かない場所へと行ってしまっていた。

「ちょっとなんなの、あなたたち」

いつの間にか囲まれていたナテアは混乱しながらも四方を警戒する。囲んでいる相手である黒マントの男たちからも警戒心は感じるが、恐怖を感じることはなかった。

それは捕まえなければならぬのはたったひとりの娘だからだろう。子供、とは言えないがそれでも普通の少女を捕えるのは男たちにとって苦勞ではない。剣　武器になりそうなものも目に付かない。

余裕の姿を見せる男たちはその証に腰を低くして構えるナテアと異なりただ突っ立ったままだ。

「……大人しくしていれば怪我もせずに済む」

そう言いながら男たちはじりじりと距離を縮める。

ナテアは睨みつけるような視線を男たちに送る。それは小動物が威嚇のために毛を逆立てているよう。

狩る側である肉食動物は精いっぱい威嚇する小動物を逃げられないように追いたてる。

ぐるりと囲まれたナテアに逃げる道はない。表では虚勢をはっているナテアだが、実際はもう駄目かもしれないと口元を歪ませる。無意識に握り合わせた手の片方には昔、兄から渡された指輪がはめられていた。

「つや！ 触らないで！」

ナテアは男たちの1人に腕を掴まれる。掴まれた腕を取り戻すためにもう片方の腕でもがけば、その腕も捕えられる。

背中に回り込まれ、男がナテアの両手首を腰の後ろで拘束する。

男は片手でナテアの手首を掴み、もう片腕をナテアの首にまわした。

「暴れなければこれ以上のことはしない」

ナテアを捕まえている男ではなく、周りに立つ男が言う。

「……こんなことをして。暴れないはずがないでしょ?！」

体は身動きが取れないでいるナテアだが、口は自由なため様々な悪態を男たちにつく。同様に、ナテアはなんとか体を動かそうとするが、男はびくりともしない。

歴然とした男女の力の差に愕然としながらも、逃げ出そうともがく体は止めなかった。

「離し、て」

「このっ、大人しく……」

大人しくなるどころか、ナテアは拘束されたことで騒ぎだした。

男は苛立たしげに舌を鳴らす。そしてなかなか思い通りにならないナテアにしびれを切らすと、首にまわしていた腕に力を加えた。

「うつ……！　ぐ、ぐう」

圧迫され、空気の通りの悪くなった首が小さく軋む。経験したことの無い苦しみに、ナテアの瞳には生理的な涙が浮かんた。

体中の血がたぎったように熱い。

空気を求め、口を開くが体の中に入っていない。

ナテアの体からは徐々に力が抜けていき、視界はかすんでいく。

酸素の供給されない体は、男たちの言うようにナテアを大人しくさせた。

「おい、殺すなよ」

同一の黒マントからは顔の表情を確認することはできない。しかしため息交じりの声からはあきれた様子がうかがえる。

「死んではないさ。ただ『大人しく』なっただけだ」

男はそう言うのと、浅い息のナテアを見下ろした。ナテアが大人しくなると時点で首にまわした腕の力は抜かれている。だが、まだ体中に血がいきわたっていないのだろう。布越しから伝わるのは暖かみを失くした小さな体の冷たい体温だけだった。

無機質な言葉だったが、周囲の男たちにナテアを心配する素振りはない。時折、呆れたように息を吐く者はいたがそれはナテアではなく、その背後にいる仲間に向けられたものだった。

吐く息は弱々しいが、ナテアは気を失ってはいなかった。

首元にはまだ男の腕があるが、それはナテアを苦しめるといってもバランスを保つためのようだ。

ふらつく体はナテアを今の状況にした男に支えられており、男が手を離せばすぐにでも倒れてしまうだろう。

ふと、視線を感じた。男たちからではない。

ナテアは重たい瞼を開き、視線を彷徨わせる。ぼやけた視界にうつったのは今にも飛びだしそうなアベルの姿だった。

「やめろ！」

叫びながら走り、向かってくるアベルにナテアの頭は瞬時に覚醒する。

「だめ　アベ、ルっ」

男たちもアベルの姿に気づく。走り出したアベルを逃げ出したとも思ったのか、数人がアベルの元へ向かった。

すでに近くまで来ていたアベルは男たちによって簡単に捕まえられる。男たちの後ろでナテアは小さく声をあげた。

じたばたと暴れるアベルは男の腕に抱えられる。

それで大人しくなっただけだと思われたが、次に声をあげたのはアベルを抱えた男だった。

「　　っ！　このガキ……！」

男はそう叫ぶと抱えていたアベルを投げ飛ばす。男の裾から出た手には滴り落ちる赤い血。

ナテアは瞬きもせず男の伸ばした腕の先に顔を向ける。放物線状に飛ぶそれはまるで良く出来た人形のような。数秒後、少し離れた所で鈍い音が地面に響いた。

瞬間、息がとまった。

次にナテアは目を見開き、大きく息を吸い込む。

「アベル！」

身を翻しながら叫べば、少しだけ体がふらつく。しかしナテアはそんなことを気にもせずにもがいた。

男が力を抜いていたおかげか、ナテアの急な動きにナテアを囲っていた腕が緩んだ。

一瞬の隙に男の腕から逃げ出せば、ナテアはアベルの元へ駆け出していた。

芝生の上に横たわるのはナテアよりもずっと小さな体。

ナテアは膝をつくとアベルを抱き寄せる。気を失ったのか、アベ

ルの目は閉じられていた。

「こんな……ひどい」

顔を歪ませたナテアはアベルを投げ飛ばした男を鋭く睨みつける。

院長や孤児院のみんながいる場所でも悲鳴が上がっていた。立ちあがる人、口元を押さえる人、子供たちの目を覆う大人がいれば、抱きしめる者もいた。

そんな様子はナテアの目には入っていなかった。いや、視界には入っていたかもしれないが、ナテアの意識は別であり、目に入らないのだ。

突然、先ほどまでナテアを囲んでいた男たちは腰を低くし、構えた。

男たちを睨むナテアの視線には怒りと悲しみと、殺気がこもっていた。

怯える人間ならいざ知らず、殺気を込めた睨みを送る人間は何をしでかすか分からない。それはナテアの腕にいるアベルも然り、そして今のナテアもだ。

怒りで我を忘れる。そこまではいかないが、今のナテアにとって冷静な判断は難しかった。

ナテアの頭には大人しく捕まらなかった自分への自責の念。そして相手に対する……、

「ゆるさない」

ナテアは低く呻いた。

アベルの頬に当てていたナテアの手にある指輪があやしく光る。指輪はナテアがヴィルデの町で出会った花売りの少女の指輪と同じ緑の石だった。

光る指輪に促されるように、孤児院を囲んでいた植物たちが一斉にうごめきだす。

まるで成長を促されたように枝が、蔓が急速に伸びると、構える男たちへと襲いかかった。

「魔石か……！」

叫び声をあげながら四方から伸びる植物に男たちは散り散りになった。

丘の上の孤児院は森に木に花に、豊かな自然が周囲を囲む。

迫る植物から離れようとするが足を着ける場所全てに植物が生えており、男たちの足をからめ取ろうとしていた。

蔓が絡みついてしまえば抜け出すことはできない。そして、男たちの腕や足、腰、と体中を捕縛していく。徐々に加えられる締め付ける植物の力に、男たちは苦痛に顔を歪ませた。

植物の成長の速さは凄まじかった。

そのため、ほとんどの男たちは体をからめ捕られてしまった。が、まだ残っている者もいた。

「小娘め」

残った男の1人が舌を鳴らしながら手を耳にやる。黒いフードの中からナテアの時と同じようにまた、緑の光が放たれた。

空気を切るような音がナテアの耳を掠める。ナテアと同じ緑の光でも男の魔法は風だった。風が植物を切っていく。

緑の光を放つ男を中心とした風はナテアの魔法で成長した植物に襲いかかり、しかし植物は次から次へと成長の速度を緩めない。

他の残った男たちも魔法を繰り返す。無限ともいえる植物に苦戦を強いられていたが、徐々にナテアの魔法は押されていく。

「余興か」

離れた場所にいる男が言う。

どこことなく楽しそうに聞こえる声の持ち主は院長と対話をしてい

た男のもの。男がちらりと院長へ顔を向ければ、青ざめた顔が目に入る。それも一瞬で、院長から部下の男たちとナテアに向きなおせば全く反対の言葉を口にした。

「つまらん」

そしてこんな余興はもう終わりだとしても言うように男は腕をあげ、指を鳴らした。

突然、巨大な炎が上がった。

炎は急に現れたかと思うと、ナテアの植物を燃やしていった。風や水に対して、いくらか耐性があるとしても、植物は火には弱い。炎に対してナテアの魔石は歯が立たなかった。

ナテアは黒く焦げていく植物たちを茫然と見やる。そしてその炎の中でうごめく人を見た。

「ちよっ……！ 中に人が！」

植物に絡め取られていた男たちだった。熱さに悲鳴とうめき声をあげている。

運良く植物だけが燃え、逃げだせた者もいるが、助けを求める「仲間」を助けることはなかった。

「なんでっ」

助けないのか、そう言っている間にも炎の勢いはあがっていく。

ナテアは院長たちの方へと顔を向けた。

やはりあいつだ。

院長のすぐそばに立つ黒マントの男。男の左手首　多分腕輪だろう　は燃え盛る炎と同じ色を放っていた。

ナテアの視線に気づいたのか、男はナテアへと顔を向ける。びくり、と肩を震わせるナテアをじっと見つめるようであったが、特に興味を示すこともなく顔を背けた。

男は、叫び声をあげる仲間にも同様に興味を示すことなくマントを翻し、背を向けて歩き出した。

動揺したのはナテアと孤児院の人間だけ。院長は苦々しく唇をかんだ。

「何で助けられないのよ！ 仲間でしょ？！」

思わず叫んだあと、ナテアはあわてて口に手を当てる。

そんなことを言える立場ではなかった。

つい出た言葉にそう思うナテアだったが、これはさすがにひどすぎる。

ナテアは男たちを懲らしめようと思ったただけで殺そうとまでは思っていないかった。いや、もしかしたら心の中のどこかでは違った思いもあつたかもしれないが。

しかしさすがにここまで望んではいないと断言できる。

ナテアは顔を下げ、両手を力強く握りしめた。もう指輪は光ってはいない。

顔をあげる。たとえ憎くても、人が死ぬのは嫌だ。

「、」

国の言葉ではない言葉を呟けば突如、地面から突き出すいくつもの水の柱。

普通の水では消えない魔法の炎は瞬時にその勢いを失くしていく。炎がすべて消えると、ナテアは大きく息を吐いた。

「あの娘……」

現れた水の魔法に、炎を出した本人である男が振り返っていた。ナテアは男に見られていると知らずに、次の言葉を紡ぐ。

黒く上がる煙の中から淡い光が2つ、3つと上がる。

植物の燃えた臭い以外に生臭い、焦げた肉の匂いが辺りには漂っており、男たちが重度のやけどを負っていることは明らかだった。しかし、燃えた跡の中での光が消えると、もぞりと動く影があっ

た。

いくつもの影は炎の中で動けずにいた男たちのもので、中にはもう少して死んでしまうという男もいた。

「……やはりそうか」

一人うなづく男の横で、部下の男が近づく。男は部下に視線をやり小さく「行け」と命ずる。命を受けた部下は頭を下げると倒れている男たちの元へ向かった。

光の魔法で死は免れたが、重症なものには変わらない。

もしこれが魔石による魔法だったならば、例え力の弱いものでもまだましだったに違いない。

男は風の魔法で転移していく仲間の男たちを見ながらやりと口角をあげた。

「見つけました」

それは誰に向かつての言葉なのか。

男もまた、他の仲間の風の魔法で姿を消した。

「はあーっ」

ようやくいなくなった男たちに誰ともなく安堵の息を吐く。

ナテアもまた、男たちがいなくなったことで同じように安堵していた。

「アベル……」

ナテアの腕の中にはまだ意識を失ったままのアベルがいる。首元に手を添えれば意識は失っているがはっきりとした鼓動が伝わってくる。

（でも意識を失ってくれていてよかった）

生きた人間の燃える姿なんて子供が見るものではない。大人でも同じだが。

それでも、ひとりでもあんな悲惨な光景を見た子が少なければい

いが。そう思いながらナテアはアベルを腕に抱いたまま、地面に背中を預けるように倒れた。

実際、ナテアも先ほどの様子を思い出せば胃がむかつてくる。

……しかし自分がまいた種である以上、そう言うてはいられない。

「考えてみれば、私が大人しくしてたらこんなことにはならなかったのよね」

その場合、どんな展開が待っていたかは考えることはしない。ただ、今と同じ状況ではない可能性は高いはずだ。

「私、のせい……」

地面に寝ころんだまま空を見上げる。正面に見えるのは少しばかりの煙と、雲と、どこまでも広がる青。

ポケットに手をやれば、2本の小さな花があった。

花は焼け焦げた孤児院の庭や牧草地に似合わず、甘い匂いを漂わせる。風に揺れる花弁はやさしい色をしていた。

視界がぼやける。

ひとつ、瞬きをすれば涙がこぼれた。

風の強い日

枝葉の鳴る音が聞こえた後、一陣の風が窓を通り抜けて室内へと流れ込んできた。

室内の片隅に佇んでいた孤児院の院長　クレナート領主であるラルスはそれまで向けていた視線を一度窓へ移すと眩しそうに目を細める。

真昼から少し過ぎた時間。

頭上にあつた太陽は斜めに移動し、その日差しが窓から入り込もうとしていた。日よけのために窓には薄い布が垂れ下がっているが、時折吹く風で布はふわりと舞い上がり日差しの侵入を許していた。

「今日は風が強いな……」

ポツリと呟かれる言葉に返事をする者はいない。

ただ静まり返る部屋の中、窓脇のベッドには小さく寝息をたてるナテアがいた。

「　ラルス様」

室内と廊下をつなぐ扉から控えめにノックがしたかと思うと、その後すぐにラルスと呼ぶ声が続く。

「入れ」

ラルスは特に外の人物の確認をすることもなく入室を許可する一言を発した。

「　失礼します」

一拍おいた後、扉が開く。入ってきたのは自警団に所属する40代前後の男。出入り口の扉とほとんど変わらないくらい長身の男はその体に似合わず、ノックのときと同様に静かに入室した。

「ぱたん、と扉が閉まればそれを待っていたかのようにラルスが口

火を切る。

「それで、何か分かったか？」

「全くといっていいほど上手く隠しています。外の現場と目撃者がいなければ盗賊の仕業と確信して思えるほどに」

「……そうか」

ラルスの相槌に耳を傾けながら男は声を落としたまま話を続ける。
「町民たちは山賊の残党だと思っっているようです。今日の昼、町を襲った山賊の……」

孤児院を襲った男たちが姿を消した後に着した室内にいる男を含む町の自警団員は、あの惨状にしばらくの間呆然とした。

町のふもとからも丘の上にある孤児院から不審な煙が上がっているのは確認していた。しかし実際に自警団の男たちが目にしたのは予想を超えたものであった。

主要な部屋から調理場の小さな棚まで荒らされていた館内はもちろんだが、ラルスや孤児院の子供たちを保護した館の周りが特に。つい鼻を覆ってしまいたくなるような異臭と所々抉られた地面。何かしらの魔法がぶつかり合ったのは誰が見ても一目瞭然であった。

男はたった数時間前見た状況を思い出すと口を閉じた。

室内にいる人間はラルスと男に加えてベッドで眠るナテアの3人。それまで話していた男が黙ったことで外にいるであろう人の声や鳥の鳴き声が自然と耳に入ってくる。2階であるこの部屋の窓辺からは丁度枝に止まっている数羽の小鳥が見えた。

窓から見える風景だけを見れば普段となんら変わらない。しかし窓から下を覗き込めば黒く焼け焦げた牧草地が広がっていた。

男は小鳥が枝から飛び立つのを見送ると大きく息を吸い込む。

「申し訳ありませんでした」

深く腰を曲げ、言ったのは侘びの言葉。言い終わっても男はその姿勢を崩さない。

「何がだ」

しかしラルスは真剣な様子の男に対し、とぼけた風の返事を返す。
「そ、れは。ラルス様の元へすぐに駆けつけ……」

「子供たちの様子はどうだ？」

ラルスは男の話に全く耳を傾けようとはせずに、ついには話題まで変えてしまった。

そんなラルスの態度に男は床に視線を向けたまま瞬きを数回する。
よくあることだった。それは悪い意味ではなく。

良くも悪くも、ラルスは相手が本当に謝罪の気持ちを持っていると判断したらそれ以上追及はしない、そんな男であった。

男は入室してから崩さなかった硬い表情でさらに唇をかみ締める。
「はい。気を失っていた子供たちは今ではほとんどが起き上がっています。ただ、気を失う前に見た光景を覚えている子もいるように……」

「子供たちには本当に悪いことをした。どんなに怖かったか……、詫びても詫びきれん」

世の中には人の記憶を消すことができる魔法があるとされる。

あるとされる、というのははっきりと確証されていないからだ。

それは秘密裏に研究されている魔法か、遠い昔に消えてしまった魔法か、それとも人のうわさが作り出した魔法か。

言えるのは、たとえ存在していても安全な魔法ではないということだ。

魔法は完璧ではない。

できたとしても、人のもっとも繊細な部分である心はただ傷つくことだけ。

人の心を動かせるのは魔法ではなく、同じく人の心だけなのだ。

弱弱しく呟かれる声に、未だ腰を折ったままの男は顔を上げてラ

ルスの表情を確認することができなかった。ただ、見えたのは床に映るひとつの影。窓からの光で映る人影は、同様に映る少しだけ盛り上がっているベッドの端で肩を丸めているようだった。

それからまたしばらく時間がたってコンコンと扉をたたく音がした。

そのときはまだ自警団の男を含めた3人が室内におり、沈黙が辺りを包んでいた。

「院長、はいらっしゃるか？」

若い男だと思われる声が聞こえると、少しだけ張り詰めていた空気が窓の外へと抜け出していく。

ラルスとともにいた男は体こそ元の状態に戻していたが動けずになっていた。男は話も続けずベッドに横になっっている少女、ナテアを見続けるラルスにどうしたものかと戸惑っていた。

「どうぞ、お入り下さい」

ラルスの声が部屋に広がる。男は一瞬、ラルスの言葉遣いに違和感を感じながらも、それまで張り詰めていた緊張感からの開放のためか、気にはなっても深く考えることはなかった。ほっと息をつき、開いた扉に顔を向けた。

「それではラルス様、失礼いたします」

通常の成人男性よりも少しばかり高い身長で器用に腰を曲げる。

「ああ、わざわざすまなかったな。私ももう暫くしたら子供たちのところへ向かうでしょう。それまでは頼んでもいいか？」

「もちろんです、……では」

男は新たに入室してきた青年と思われる男をちらりと見ると、最後に一度ラルスに視線を送り部屋から退出していった。

パタン、と扉が閉まり足音が徐々に遠ざかっていく。

新たに部屋へ訪れた男は足音が聞こえなくなるのを確認するとそれまで頭を覆っていたフードを取った。

「そのままです」

フードから流れ出たのは少し青みをおびた銀髪。王族特有の髪を片手でくしゃりと掻き分けながら男は言った。

扉のほうへと歩み寄ろうとしていたラルスは男の言葉に足を止めるとその場で軽く頭を下げた。

「本来ならば私から挨拶しなければなのですが、……申し訳ありませんヴィルフリート殿下」

ラルスは狭いながらも領地を持つ貴族であった。親兄弟を様々な理由でなくした子供たちのために領館を孤児院としたり、領内の安全を図る目的として自警団を組織したりと、ラルスの行動は幅広い。ヴィルデの町を中心としたラルスの治めるクレナート領は主要な都市や王都からも遠い。だが領民たちにとって、不便さは感じてても不満を感じることはほとんどなかった。

「いや、私が勝手に動いたことだ。まあ、私だけではないようだが……」

謝るラルスにヴィルフリートは目を細めた。

「昼のことでみなも大変なはずなのですが……」

「それだけ慕われているということなのだろう。町、いや領民に」
現に今も多くの町民たちが孤児院に集まっている。領主であり、孤児院の院長であるラルスが呼びかけてないのにもかかわらず。

ヴィルフリートは先ほどまでいた男を思い出した。

がっちりとした体格と風貌から見てクレナート領の自警団でそれなりの地位のものだろうことは予想できた。

あの男もラルスを慕う者のひとりなのだろう。

男が退出する際の一瞬。フード姿のヴィルフリートを見る目は鋭く、訝しげであった。

しかし考えてみれば、ラルスを慕うものからすると顔を隠した怪

しげな男がラルスに近づくのだから当たり前な態度ではある。

「ところで、よろしいのですか？」

「ああ、しばらくは。早馬もすでに出した」

ラルスからの質問にヴィルフリートは何が、と聞き返さない。

「数年ぶりの本国へのご帰還が、このような形になってしまいなんと申し上げたらよいか」

ヴィルフリートが巻き込まれたのは偶然だった。

クレナート領への王族訪問はほんの数時間の予定で、王女を乗せた馬車が町を通るだけであつた。そのため本来はその土地を治める貴族の館で王族を迎え入れたりするのだが、それすらも省略されるほど。

それほど重視されていない領地だといわれても、どこか少し不自然な気もする。

「いや、むしろ助かつた。あのままだったら王都まであの馬車に乗らなければならなかつたからな」

ヴィルフリートにとって長時間馬車に揺られることは苦痛、ではないが得意でもなかつた。馬車は馬車で、ものすごく派手ではないがやはり王族が乗る馬車ということで常に気を張らなければならぬ。

どうせなら馬のほうがいい。

どちらにしても護衛が囲むのは変わらないが。

それにヴィルデの町に立ち寄ることは伝えてあつたし、次の領地で落ち合うことは決めていた。ここでの出発が少しくらい遅れても大丈夫なはずだ。

「しかし王女様はがっかりされているでしょう。なにせ久しぶりの再会でしたでしょうから」

ラルスの言葉にヴィルフリートは軽く微笑んだ。

家族の中で唯一信頼できる存在。それが妹だった。

留学中に何度か会う機会があつたが、最後に覚えている姿から随

分と変わっていた。だが姿かたちは成長していても見えない部分は変わっていないようだった。

向けられる笑顔と言葉に何度助けられたことか。

そしてそれは。

妹だけではなく、ラルスの近くで眠っているナテアにもいえた。

「ラルス様ー！」

突然、窓の外からラルスと呼ぶ声が響いた。

「いらっしやいますかー。ラルス様ー！」

子供たちの声ではない大人たちの声。その声を聞き、ラルスは「まったく」と息を吐く。

ベッド脇から移動し、窓の外へと顔を出す。その間に何度か同じような呼びかけが続いた。

「怪我人もいるんだ。静かにしなさい」

ラルスがそう言えば「すみません」とばらばらと謝罪の言葉があふれた。

窓越しで会話をするラルスをヴィルフリートは黙ったまま見つめる。

ラルスは本当に慕われているのだろう。ラルスと呼ぶ町民たちの様子がそれを裏付ける。

ナテアやクラウスの王族であるヴィルフリートに対して、何も知らなかった子供のころと変わらない態度である理由がわかった気がした。

「殿下、申し訳ないのですが部屋を少し離れます」

「私はかまわない。呼ばれているだろう？ 早く行ってやれ」

「ありがとうございます」

ひとつ、お礼の言葉を述べるとラルスは足早に部屋から出て行ってしまった。ヴィルフリートはそれを確認すると部屋の中心から窓のほうへと移動する。

少したつて、ヴィルフリートはラルスが外で町民たちに囲まれているのを見つけた。

周りでは自警団だけではなく町の男が、女が、年齢に関係なく倒れた木や燃えた草木の後片付けを行っている。ほとんどが自主的に集まってきた者たちばかりだ。

「ん……」

暫くの間外を眺めていたヴィルフリートは背後でかすかに声を聞いた。振り返ればナテアがごろりと寝返っている。

詳しくは聞いていないがナテアは孤児院を襲ってきた男たちに魔法で抵抗したらしい。

「……無謀な」

もしかしたら死んでいたかもしれないのに。それを無謀といわず何という。

ヴィルフリートは眠るナテアを見下ろしながら、無意識に言葉を吐き出していた。

「大丈夫よ……アベル」

むにやむにやと言うのは寝言か。アベルというのはナテアが倒れていたときに抱きしめていた子供の名前だ。

『だってママだから！』

ふと思いついたのは今朝出会った花売りの少女。

少女は母親を守るために山賊の前に飛び出した。まだ小さく、弱い少女がかなうはずもない山賊たちの目の前に。

良くいえば「勇気」、悪くいえば「無謀」といえる行動。

それでも。

「……羨ましい」

大切な、守りたい人がいることは。

ヴィルフリートの頭に思い浮かぶのは妹、家族と数少ない友人たち、そして。

ナテアが「うん」とうなり声を上げた。窓から入り込む夕日の眩しさに眉を寄せ、不満げな様子でシートに顔を埋めている。

ヴィルフリートは口元を緩めながらこそと動くナテアを見ると、後ろに振り返った。

森は沈む夕日に彩られている。

下ではまだラルスたちの姿を確認することができた。

夕日の眩しさに加えて、夜の空気をまと始めた風がヴィルフリートのを揺らす。

「風が強いな」

目を細めて空を見上げれば風によって花の香りがした気がした。

命名の日

木造のとある宿の一室。

ガヤガヤと人のざわめきが、鍵が閉まり密室となっている部屋の中まで届いている。

3本足のテーブルとそのテーブルの上にあるランプ以外、家具といえるものは年季のこもったベッドだけ。そのベッドの上で盛り上がったシャツがもぞりと動いた。

「ん……、うるせえ」

いかにも不機嫌そうな声の男　　クラウスは薄い壁から伝わる人の声と朝日の眩しさでシャツから顔を出した。

部屋にある唯一の窓にはカーテンはなく、外の日差しがそのまま入り込んでいた。すでにランプの必要性はないほど外は明るくなっており、外には働いている町人たちの声が響き渡っていた。

ふわぁ、と大きくあくびをするとクラウスは立ち上がり、次いで背伸びをした。寝癖のついたまま靴を履き、ベッドの端で丸まっている上着を羽織れば準備は万端だ。

カタカタと窓が揺れる。

両開きになっている窓を開いてやれば、まだ少し夜の名残を残した空気が室内を満たしていく。当たる朝日にクラウスは目を細めた。朝がどんなに弱くとも騎士として生活していくうちに朝の準備に慣れていく。クラウスもそれに当てはまっていた。

「ここを出ればようやく王都か」

クラウスが現在いるのはダールベルク王国、王都に隣接する領内にある町だ。領館のあるこの町は王都と近いこともあって、ラルスの治めるクレナート領よりもだいぶ華やかであった。

ついでに言うと人口もクレナート領よりもはるかに多く、そして

ざわめきもクレナート領よりもはるかに大きい。

最も人の集まる王都よりは少ないとはいっても、比較的穏やかな場所ので育ったクラウドにとっては何れも居心地の悪さを感じることもある。朝については体が慣れたが、うるさすぎるざわめきは時折クラウドをうんざりさせる。特に孤児院に帰った後は。

クラウドは窓から外を見下ろすとまだ少しだけ重たいまぶたのまま、一晩を過ごした部屋を出た。

クラウドは宿の部屋となっている二階から一階へと階段を下る。一階は食事のできる場所となっており、いくつものテーブルが並んでいる。

部屋を出た瞬間から焼きたてのパンのにおいとダールベルク国内ではどの地方でも馴染みのあるスープの香りがクラウドの鼻をくすぐっていた。それらに刺激されるようにクラウドの胃は空腹を訴え始める。鳴り出す腹を押さえて一階へ足を踏み入れれば、クラウド以外の客が数人、テーブルにつき朝食をとっていた。

「よお兄ちゃん！ 朝食かい？」

調理場と一番近くの、カウンターとなっている席へ腰を下ろせばこの宿の主人が大きく声をかけてきた。

「ああ、何でもいいから飯をくれ」

軽く腕を上げるクラウドに「まかせときな！」と主人は調理場へと姿を消した。

「な、なんだこれは……？」

クラウドは朝食が出てくるまでの間、何度かあくびを殺しながら王都までの旅筋を考えていた。

旅筋、とはいっても行きなれた道で迷うこともないだろう。ただ今回の孤児院への帰郷にて起こったことで、普段よりも周囲への注

意力が落ちているかもしれない。

数年ぶりに再会した友人とのことで心が浮ついているのだ。

「なんだ、とはなんだ。見りゃわかるだろ、朝食だ。まあ、ちいとはかしいつもとは違うがな」

「ちいとばかりか？　これが？」

「ははは！　と笑う店主の横でクラウスは並べられた料理に目をやった。

もしかや幻覚か、それともまだ寝ぼけているのかと、クラウスは腕で目をこする。しかし目の前の料理は一寸たりとも移動すらない。

「今朝だけ特別の料理だよ！」

首をかしげたまま、一口も食べようともしないクラウスに同じく宿泊客らしき男が声を上げた。

「とくべつ……？　どういうことだ？」

男の声にクラウスは周りに視線をやった。バラバラとテーブルに座る、宿泊客たちはクラウスと同様に朝食をとっているようだった。そして、どの客のテーブルにも

「……なんでこんな豪華なんだ？」

どのテーブルにも何皿にもわたり、朝食とは思えない豪華な食事が並んでいた。それはクラウスの知る一般的な宿の朝食であるパンとスープに比べたら何倍もの量と豪勢な食事であった。

「妻がな、もうすぐしたら帰ってくるんだよ」

「は……？」

宿の主人が聞いてくれよ、といわんばかりの様子で食事を始めたクラウスに話しかける。

訳のわからないクラウスに対して、周りの客たちは「また始まった」と苦笑いを漏らした。

「ようやくこの日がきたからな。いやー、一ヶ月は長かった」

「は、あ」

いつの間にかクラウスの隣に座り込んだ主人はクラウスの相槌を聞いているのか聞いていないのか、ひとりでペラペラと続ける。

家を離れていた妻が帰ってきたのか？

理由はどうであれこんな料理が出てくるなら、今日泊まったことが偶然だとしても幸運に違いない。

クラウスは話し続ける主人に適当に頷いてみせながらも、意識は目の前の食事に向けられていた。定番のこんがりとしたパンにスープ、そしてよく煮込まれたカニンの肉や新鮮な野菜、果物。それらはまだ朝だというのにクラウスの腹の中に詰め込まれ、皿の上から姿を消していく。

クラウスの食いつぷりに主人は開いていた口を閉じるとおもむろに立ち上がった。

「いい食いつぷりだ。まだ料理はたつぷりあるからな。ちょっと待ってな！」

「いや、これ以上は……」

引き止めるクラウスに主人は空になった皿を片手に積んだまま豪快に笑った。

「料金なんて取りやあしないよ。言つたろ？ 今日とは特別なんだ！」
そう言つて調理場へと姿を消した主人にクラウスはますますわからないと眉を潜めた。

「今日は娘さんのオルトウスなんだとよ」

テーブル席から聞こえてきた言葉に、クラウスは首だけ後ろに向ける。

話し出したのは宿泊客のひとり。そして宿の主人が調理場へと引っ込んだ食堂で、他の客たちもつられるように次々と話し始めた。

「初めての子のオルトウスらしいからな。そう思えば、浮かれる気持ちは分からなくもない」

「だが、朝からその話を何度も聞かされるのは勘弁してほしいぜ」

「まあな。でもよ、おかげで腹いっぱい飯にありつけたんだから

いいじゃねえか」

「ははは！ そうだな！」

食堂のテーブルにバラバラに座る客たちはもちろん知り合い同士ではない。どの客もクラウスと同様、偶然この宿に宿泊したものだばかりだ。しかしこの豪勢な朝食、という出来事に居合わせたものの同士の共通点がこの場を盛り上げている原因のひとつであった。

クラウスは皿のなくなったテーブルの上に唯一残されたスープでお茶の代わりとしてのどを潤しながら男たちの話を聞いていた。

ゴクゴク、と数度に分けて流し込むと空になったカップを卓上にもどす。クラウスは手の甲で口元を拭いながらポツリと言った。

「オルトウス……、『命名の日』か」

クラウスが今いるダールベルク国ではオルトウスという儀式が行われる。

儀式の内容は生まれて約一ヶ月の赤ん坊に神の祝福と正式な名前を与えるというもの。医術は日々進歩しているとはいえ、ダールベルクをはじめその他の国でも未だ幼児の死亡率が高い。特に生後間もない赤ん坊の。だからか、儀式には祝福の意味の他に「感謝」を含むといわれることもあった。

ダールベルクでは生まれて約一ヶ月後、赤ん坊の誕生を神が祝福するオルトウスが行われる。

国によつては様々だが、大抵はダールベルクのように生後一月から半年の間でオルトウスに近い儀式が執り行われている。

残念ながらその儀式の前に亡くなってしまう子も多い。その場合、その赤ん坊たちは神の元へと行き、再び同じ夫婦の間に、または夫婦に近いものの子として生まれると信じられている。そして儀式のやり方は違っても、亡くなってしまった子への考え方はどの国も似たようなものであった。

オルトウス、というのはダールベルクの歴史書にも載っているほど古い言葉で現在の「命名、誕生」を意味している。その古語といつていいほどの言葉が現在でも使われていることから、長年の浸透を疑うことはないだろう。

まだ話の続いている食堂内を、クラウドは特に口を挟むこともなく眺めていた。そんなクラウドの元へ、調理場から戻った主人が料理を持ってきた。

「待たせたな兄ちゃん」

そういつてテーブルに置かれたのは手のひら大のカップに入った飲み物だった。

「今朝仕入れてきた果物を搾ったんだ。量はそんなにないが、食後の口直しにくらいにはなるだろ」

「そんな……、こちらこそわざわざありがとうございます」

クラウドは目の前にあるカップを口につけた。ドロリとした食感とともに感じた甘酸っぱさが、頬をじんと痺れさせる。

「おいおい、俺らは貰ってないぜ主人」

「そうだぜー、俺らにはないのかよ」

主人がクラウドに持ってきた果物の飲み物に対して、客の男たちが口々に声を上げた。

「ああ？ 他のを何杯もお代わりしただろ。今日は特別であんたらが客だといつても、さすがに食いすぎだ。もうやるもんは残つてないからな」

「なんだよ、けち臭いな。なあ？」

主人の言葉に男たちは悪態をつきながらも互いに笑いあっていた。それにどうやら何杯もお代わりしたことは事実のようで、ほとんどの客たちは「ま、これ以上出されても今はもう食えない」と腹をさすっていた。

「だがうまそうだな、それ。くそつ、もう少し減らしとけばよかったぜ」

クラウスに比較的近くに座る客が羨ましそうにクラウスの飲む姿を眺めていた。しかし男の目の前にも何枚もの皿が並べられている。しかも食べきれなかったのか、すでに冷めきっている料理は空になりきつておらず、食いかけのものがいくつも残っている状態だ。

クラウスはそんな様子でもまだ「うまそうだ」という男に内心、苦笑いを漏らす。

「まあな」

そして男の言葉に答えるようにクラウスが言えば、カランと入り口のベルが鳴った。

外へとつながる宿の扉が開いた瞬間、外の喧騒とともにひとりの女性がその扉をくぐった。

まだ二十代前半だと思われる小奇麗な女性の両腕には小さな赤子があり、安心しきったように寝息をたてていた。

「みなさん、いらっしやい。……ただいま、グアン」

宿の客である男たちにニコリと笑いかけた女性は、宿の主人を見ると笑みをさらに深める。

「ミリア！」

「ちよっ、グアン！ お客様の前で！ それにこの子も起きちゃうわ」

ミリアと呼ばれた女性は恥ずかしそうに声を上げながらも、しかし嬉しそうに宿の主人であるグアンに抱きしめられている。

主人の話を朝から何度も聞いていた男たちはこの場に現れた女性が誰であるか、今更聞く必要はないだろう。彼らはそれまであげていた大声の代わりに、「やれやれ」といいながらも幸せそうな宿夫婦に暖かな視線を送った。

「あ、ああ！ 悪い、ミリア。……カーリーナもごめんな」

グアンはミリアの腕に抱かれている赤子　　カリーナに声を落として話しかけた。

カリーナはよく眠っているのか、父と母のやりとりに気づかないままスヤスヤと目をつぶったままだ。

そんなカリーナを蕩けそうな瞳で見つめるグアンはさっきまで宿泊客に大声を出したり笑っていた人物とはまるで似ても似つかないゴツゴツとした大きな手を赤子特有の柔肌に伸ばす。おそろおそろと伸ばされた手に、ミリアがグアンをおかしそうに笑いながら見上げた。

「神官様、どうもありがとうございます」

肩を寄せ合った宿夫婦が声をそろえて言う。

ミリアが宿内に入るときに扉を開け、ともに室内へ入った人物は声をかけられるまでひっそりと扉の前に立っていた。その人物は線が細く、ひよろりとしている青年だ。身長はクラウスと同じくらいだが顔に浮かぶあどけない表情から、年齢はクラウスよりも下の十五、六才のように見える。

まだ青年、というよりも少年という言葉が似合うであろう彼は、宿夫婦に言われた「神官様」という言葉に照れたような、はにかんだ笑顔をもらった。

「いいえ、お気になさらず」

青年、いや少年は純白ではないが白を基調としたマントを羽織っている。マントの胸元にはダールベルクにおける神殿を象徴する紋様が刺繍としてあしらわれていた。

彼の着ている服は神殿にいる人間がきているものと同じように見えるが、もしかしたら彼はまだ正式な神官ではないのかもしれない。王都へ戻れば「見習い騎士」であるクラウスは少年になにか近いものを感じた。

「 それではわたしはこれで帰りますが、何かありましたら神殿へお越し下さい」

自分のことを「わたし」と呼ぶ少年の言い方はたどたどしいというよりも初々しい。ピシッと背を伸ばし誇らしそうに胸を張る少年に、この場にいる大人たちは目を細めてその様子を見ていた。

「 ええ、ありがとうございます、神官様」

ふふふ、と笑うミリアに少年はほんの少し顔を赤らめるとペコリとお辞儀をした。

「 あ、あの。ではこれで」

顔を隠すように、下げた頭のまま少年は後ろを向いてドアノブに手をかけた。

「 あっ」

そのまま扉を開けて外に出るかと思われたが、少年はドアノブに触れたまま思いついたように言った。

クルリと振り返った顔には先ほどまでの照れはない。だが代わりに、キラキラとした瞳を投げかけていた。

「 今回のオルトウス、参加できてとても幸運でした。だから、その……、ありがとうございます！」

少年の瞳の先にあるのはあどけない寝顔のカリーナ。

そして眠るカリーナの小さな腕には水色のリボンと銀色に輝く糸が結ばれていた。

噂

ミリアは自身の腕の中で眠るカリーナを慈愛に満ちた瞳で見つめていた。

神官見習いの少年が店から去り、次いでクラウドを含む宿泊客たちも一人、二人と席を立った後。食堂に残っているのは二人の客と遅めの朝食をとる宿夫婦のみだった。

「いやあ、それにしてもカリーナは幸せ者だな」

並ぶように宿夫婦は座り、宿の主人でありミリアの夫であるグアンは客たちが苦笑いしてしまうほど、終始にやけた表情を振りまいていた。

「ええ、まさか姫様がオルトウスに参加されていたなんて。しかもその髪をカリーナのために抜いてくださったのよ」

カリーナの白い腕には空色のリボンと銀色に輝く糸が結ばれていた。

銀を纏った髪を持ち主はこの国の中では王族か王族の血に連なるものである。このことはまだ幼い子供を抜きにして、国民のほとんどが知ることであった。

髪自体にはなにかしらの価値があるわけではない。しかし、その髪を持ち主である王族が生まれてきたばかりの平民の幼子に自身の髪を与えるという行為に価値があるのだ。

「その姫様っていうのはエルミール様だろ、きっと」

「あら、どうしてわかったの？」

おっとりとした口調でミリアが夫のグアンに尋ねるが、その顔は夫が答えるであろう内容を予測しているものであった。

「『変わり者のお姫様』だからな。まず俺らのような平民のオルトウスに出てくる王族ついたらあの姫様くらいしか思いつかねえよ」

「変わり者って……。でも私はあの姫様好きよ？　清楚で、可愛らしくて、そして優しい」

娘を抱くミリアの頭に思い浮かんだのはつい今朝、目にしたばかりの可憐な少女。

ミリアにとつて高貴な生まれの子女とは日に焼けていない白い肌に美しいドレスを身にまとい、想像もできないような豪華な生活を送っている、そんな方たちであつた。それはミリア以外の平民も思っているいだろ？ 共通した認識で、女性なら一度くらい夢見たことに違いない。

そしてミリアが見た少女、エルミラは噂通りの、羨むほどに可愛らしい姫であつた。

「俺も、そう思うぜ」

ミリアの言葉に反応したのはグアンではなく残っていた客の一人。宿夫婦の座るカウンター席から二つ、テーブルを挟んだ席に座る男であつた。

「普通の貴族、良家の子女達は俺たち平民に近づくどころか、用がなければ屋敷からお出にならないからな」

そして残るもう一人の客の男が前の客を引き継ぐように言った。少しばかり蔑みを込めた言い方で。

ほとんどの客が食堂から出払ってしまった今、ミリアのさほど大きくはない声もまだ居残っている者の耳に届くには十分で、それは逆もいえる。客たちの話を聞いたグアンが背もたれに肘をつく格好で後ろを振り返った。

「ご立派な屋敷の中で贅沢な暮らしをしても食ってけるってか？　羨ましいこつた」

そういった後「ふん」とわざとらしく鼻を鳴らし、わざとらしく落胆する。

「ああ。きっと俺たちには想像すらできないような生活なんだろう

ぜ」

「はっ、言ったって俺らには関係ない話さ。それに貴族様にとつても俺ら、平民のことなんて関係ないんだからな 聞いたか？ あの話……」

貴族と平民、主人と従者、富むものと貧しいもの。人間の営みの中で必ず現れる格差。

羨んで、蔑んで、目に見えることのない壁は決して交わることがない。それでも。

いつの間にか会話の人数が増えたことに対し、ミリアは数度瞬きをして驚きを表していたが次の瞬間にはまたふんわりとした笑顔に戻っていた。

「エルミール様のような方が増えたらこの国も変わるのかしら」とえ交わらないものであっても、近づくことならきつとできるはずだから。

ミリアの小さな声で呟かれた言葉を聞いたのは、眠そうに「ふわあ」とあくびをするカリーナだけだった。

+ + + +

クラウドはイライラした表情を隠すことなく、馬をひきながら街道を歩いていった。

国内でも有数の人口を誇る街は比例して街の面積も広大だ。道はもちろん広い。しかし行き交う人の多さと町民の足である数多くの乗合馬車が街道いっぱいを覆っているためクラウドは馬に乗ることよりも歩くことを選択していた。

人が多い分、ざわめきも大きい。本来ならば話す内容も様々なの

だろうが、だがしかし、道行く人々はある話題で盛り上がっていた。

「おい、聞いたか、あの話」

「ああ、山賊が出たらしいな。今度はどの村だ？」

聞こえてきた声にクラウスがピクリと眉を上げる。

「いやそれが村じゃないらしい。ヴィルデの町だって話だ」

「ヴィルデ？　って言やあ、ここからそんなに遠くねえじゃねえか」

話しているのは、街道をまっすぐ外門の方向に向かっていったクラウス同様、外門へ続く道を歩く男たちであつた。

クラウスは宿から街へ出て数度、この話を耳にしていた。イライラしていたのはこの話題のためで、さらにヴィルデの町と比べ物にならないほどの人混みがクラウスのイラつきを助長していた。

話題の盛り上がりようから考えれば昨日、今日の最近の話に違いない。大丈夫なのだろうか。クラウスは男たちの会話に聞き耳を立て、歩きながら思う。

「何かな、町だけじゃなく領館も襲われたんだとよ」

「は……。あそこの領館は孤児院になつてんだろ？　……ひでえ話だな」

声のはつきりと聞こえると思つていたら男たちはクラウスのすぐ近くを歩いていった。旅人が商人か、二人の男たちはそれぞれ背に荷物を背負っている。

「ああ、本当にひでえ話だよ。ヴィルデの町の周りを治めるクレナート領主は領民に慕われる方だそうだしな」

「それなら俺も聞いたことがある。それに確か自警団もあつた気がする」

「地方にしては珍しく訓練されたやつがな。ま、俺たちがどうこうできる事じゃないし、せめてもの救いはその自警団があつたことだな」

小さな村、集落であつてもその地を守る男たちがいる。ただし、正規の兵士ではない彼らの持つ武器は鍬や鋤すきといった農具で、戦う

ための訓練なんておよそ受けたことがない者たちばかりである。

クラウドの今いる街　王都に隣接する領、その中でも領主直轄の街には王宮からの騎士が駐在している。国境や交易が盛んな都市、王都の周囲の街は少なからず騎士に守られている。逆を言えば、その他の地は自分たちで盗賊や山賊から身を守らないといけない。

領民のことを想う領主ならば私兵に町を守らせるか、ヴィルデの町のように自警団を組織するだろう。しかしほとんどの町や村では守ってくれる兵士や自警団なんて存在しなかった。現実、襲われたり災害にあつた際など、自分たちで何とかしなければいけないのだ。

クラウドは人混みをよけ、通りの隅までたどり着くとため息を一つ吐いた。

通り沿いには様々な店が立ち並んでいる。それらの店の前で立ち止まっていたクラウドは馬の手綱を手ごろな柱に括り付けた。

その店を選んだのは何となくだった。いや、中に入ったのは歩く中で聞こえてくる話から耳を背けたかったからかもしれない。

「いらっしやい」

お客さんかい、という声はしわがれていた。店の中にはクラウド以外の客はおらず、騒がしかった外と比べると少しだけほっとできた。

「何か見るかい？」

そういつて店の奥から出てきたのは予想通りに年配の男であつた。

「いや……」

見ているだけだ、と言うクラウドに対して男は特に嫌な顔をすることはなかった。男はしばらくクラウドの様子をうかがっていたが、

本当に見ているだけだとわかると椅子に座り眼鏡をかけなおした。

男は親指の爪ほどの石と細く先のとがった工具を手に、何やら作業をしている。

石はどこにでも落ちているようなものではなく、色のついた、加工にもよれば美しい装飾品になりうる石だった。

「気になるかい？」

「あ、いや……珍しくて」

声をかけられるまでじっと見ていたのだろう。男の手元から視線を上げると、目じりにしわを寄せた男と目が合った。

「ははは、確かに珍しいかもしれんな。普通、目にするのは作り終わったものばかりだからなあ」

「すべて手作業なんですか？」

「ん？ そうだなあ、こればかりはどこも手作業で一つ一つ作る。ちなみに、ここにあるやつは全部、わたしが作ったものだ」

入口から反対側の壁まで数歩しかいない店内をぐるりと見渡す。所々埃かぶっているここは正直清潔だとはいえないが、棚に飾つてあるいくつもの加工された石の輝きには埃かぶってなんかいなかった。

「……すごいですね。これ、この魔石を全部？」

「何十年も店を開いてたらこんなもんさ。まあだが、ご覧のとおり、客足はいいとはいえないがな」

男の店は魔石を売る店だった。

どの国でも魔法は使うが、ここダールベルク王国では魔石を使用した魔法が一般的であった。

良質な魔石が豊富にとれること、そして魔法の威力として、魔石がその効果を膨大に強めてくれることなどが理由である。

魔石に関する仕事は多い。原石を見つける、装飾品へ加工する、最近では修理修繕を行う店も出てきたほどだ。

「そうなんですか……、こんなに綺麗なのに」

何の含みもない素直な言葉。しかしだからこそ、その言葉は作り主である男の作業する手を止めるのに十分であった。

男は手を止めたまま、魔石を眺めるクラウドから入口の戸へ顔を向ける。

「そろそろ、かな」

その声にクラウドが男を振り向いたが、言葉の意味を解することはできなかった。

変わらず店内はひとつ壁の向こうに大勢の人間がいることを不思議なほどに感じさせない。

しかしその平穏も、次の瞬間にはあっけなく壊されてしまった。

「ようやくたどり着けたわ」

カラン、と外からの来店を知らせる鐘が店内に鳴り響いた。

「この辺りはいつも賑やかな。つい色んなところ、のぞいてしまったわ」

「だからお一人なんですか？ はぐれでもして」

「んー、それもあるけれど。でもそれを言ったらナタリアにまたうるさく言われるわ」

「また、ですか」

カラカラと陽気に笑う店主は新たに現れた客と知り合いらしい。

何度か会話のやり取りをしたと思ったら「少し離れます」と、店の奥へと行ってしまった。

残ったのはクラウドともう一人の客のみ。

頭の上から足元まで、すっぽり覆うようなフードとマント姿のその客は話し方から女であることは予想できた。

「この街の人？」

聞いたのは女だった。女はそれまで店主が座っていた椅子に腰かけると、フードの中からクラウドを見上げる。

「いや、立ち寄っただけだ」

いくらか間を開けたのは姿を見せない女に対して不信感を持っていたから。

その様子に女のほうは慣れたように肩をすくめてみせた。

「そう。ここは外と違って静かよね。でも窓から外を見るとあんなに人がいるの。不思議……」

女の視線に促されるようにして、クラウドも窓から外を見つめる。

特に会話もなく二人は窓から流れる風景を眺めていた。店主はただ戻ってこない。

「外がうるさすぎて、だからこの店に入った」

沈黙を破ったのはクラウドのほうだった。それを聞いた女はクスリ、と笑う。

「……なにかおかしいか？」

「いいえ、ただ一緒だと思って」

何が、とクラウドが問いかける前に女は続けた。

「私も初めは偶然入ったの。そうしたら居心地良くて、この街に来たときには立ち寄ることにしてるのよ」

そうか、と頷こうとしたとき、目に入った「それ」にクラウドは開きかけていた口をつぐんだ。

女が店に入ってきてから今までの間、「それ」に気が付かなかったのは女を意図的によく見ていなかったからだ。でなければこんな近くにいるのにもかかわらず、気が付かないのはおかしい。

「そんなにこの髪色、珍しい？」

「あ、い、いや……」

女の声に「はっ」と息をのむ。

声をかけられるまで、クラウドは女のフードからこぼれる髪を凝

視していた。

珍しいものにも、銀色の髪を前にして驚かないわけがない。たとえクラウス以外の人間であっても、同様の反応をするに違いない。

この女　　ダールベルク王国では王族かそれに近い上流階級の子女はクラウスの反応をクスクスと面白そうに見ている。

その様子に少しだけ腹を立てたクラウスは「むっ」とするように眉間にしわを寄せた。

「……おもしろいのね、あなた」

女の言葉にクラウスはさらに威嚇するような視線を送る。

「ああ、違うの。勘違いさせてしまったのならごめんなさい。いい意味で言ったの、おもしろいって」

女は言いながらフードに手をかけた。

「大抵はひざまずくか、媚びるか。私じゃなくてこの髪を見て行動するの」

はずされたフードから、長く艶やかな銀髪がさらりと流れ出る。

「……何が、いいたい」

クラウスは低く唸った。

髪を直接目にしても変わらないその態度に女は嫌な顔をするどころか、嬉しそうに笑みを深める。

「いいえ、何でも。 わたし、私はエミーよ。ねえ、あなたの名前は？」

「……クラウス」

律儀なのか、クラウスは女の質問にぼそりと答える。しかし不機嫌な表情はそのままに、渋々といった様子で。

「お待たせしました」

店主の男が奥から歩いてきた。聞こえてきた声の方向にクラウドスは視線を向ける。

「注文の品です」

男の手には木製の小箱。片手に収まる大きさのそれを、女 エミーに手渡した。

「……短時間だったし、どうなるかと思ったけれどさすがね。ありがとう」

「いえいえ、これが仕事ですから」

エミーは小箱から魔石を取り出していた。ネックレス型の魔石を確認するように目の前にかざしている。

エミーは満足したのか、ひとつ頷くと店主に代金を渡す。

「また、こんなに……」

クラウドスが宿に泊まった時の値段よりも数倍するであろう銀貨。

店主は困ったように眉をへの字によせる。

「いいのよ。急がせてしまったし」

エミーはそう言つと椅子から立ち上がった。フードをかぶり直し、今度はしっかりと髪を中へ入れ込んでいる。

「またこの街に来たら寄るわ」

「ええ、どうぞ」

エミーはチャリとクラウドスを見やる。そして店主が言つのを後ろ耳で聞きながら、外へと続く扉に手をかけた。

初めから最後まで、よく分からなかったが嵐のようだった。

しかし上流階級の子女であるのにもかかわらず、供もつけずに一人で出歩くななど信じられない。

クラウドスはピツタリと閉じた扉を見ながらため息をつく。

「いい子だろう?」

店主の言葉はクラウスの気持ちを知ってか知らずか。ただ相手は初対面の貴族の子女である。クラウスは曖昧に濁すかのようにぎこちなく笑みをみせた。

噂（後書き）

明けましておめでとうございます。今年もよろしく願います。

いいこと

神殿内にある中庭。

足音を立てないようにエルミールはそつと小走りで走っていた。まだ夏ではないが暖かな季節に不似合なマントとフード姿できよろきよろと視線を彷徨わせながら。

風でそよそよと周囲の枝葉が鳴っている。中庭から壁を隔てて、外側は生活をする街の人々がたくさんいることだろう。

しかし中庭から感じる事ができるのは人々のざわめきや煙突から上がる煙、といった気配だけ。

ゆったりとした空気がこの街の神殿を覆っていた。

そんな中、姿を隠すような恰好のエルミールはまるで不審者のように、時々すれ違う神官たちはぎょつとした様子でその背中を見送った。犯人がエルミールだとわかると「またか」と笑いながら。

「あ！ 見つけましたよエルミール様！ いったいどこに行っていたんですか？！」

エルミールのいる中庭ではなく、近くの建物から大きく声が響く。その声を聞き、しまった、とエルミールは足を止めた。

「あ、あら。誰かと思えばナタリア？ 私のことはエミーと呼んでっって言ってるじゃない」

「なーにを言ってるんですか！ エルミール様っ」

「……今日は天気か」

「は、な、しを逸らさないでください」

「分かってるわよ……」

しゅん、とうなだれ気味のエルミールのもとへナタリアと呼ばれた少女が走り寄った。はあ、とナタリアが一呼吸置く。顔には春の

日差しのせいだけではない、幾筋の汗が流れていた。

「あと少しで王城なのですから、少しはじっとしていてください」

ピシ、とナタリアが言った。

外とは違い、建物の中はいくらかひんやりとしている。石造りである神殿は、いたるところに魔石が埋め込まれ、夏は涼しく冬は暖かい。魔石からの魔法の効果で、王城も同じ造りである。

「でも、直つてよかったでしょ？ それ」

「う、それは……」

城からの使者ということで、エルミールを含む一行は神殿内に部屋を与えられていた。

そして今、二人がいるのはその部屋の中でも最も豪華なエルミールの部屋であつた。

エルミールとナタリアが話す横で使用人たちがお茶の準備をしている。部屋の中は二人の話声と、時折なるカチャカチャという茶器の音だけだ。

「そのネックス、ジーンからでしょ？ 久しぶりの再会なのに壊れたままじゃ悲しいじゃない」

「……エルミール様」

口ではうるさく言うナタリアだったが、先ほど受け取ったネックスを見る顔はとても嬉しそうだ。

エルミールはそんなナタリアに目を細めながら、テーブルに置かれたお茶に手を伸ばす。こくり、とひと口飲むのを見計らつたようにナタリアが言った。

「店でいいこと、ありましたか？」

「え？」

エルミールは視線をカップから上げる。ナタリアと目があつた。

「なんだか楽しそうな顔をされていたので」

ナタリアの言葉から思い浮かんだのは少し話しただけの少年。たぶん年は同じくらいだろうか。

最初、店に入った時は彼の赤い髪が目を引きいた。しかしその後はそれ以上に鋭い視線が。

エルミーラの銀髪を見ても変わらなかった態度は、はたからは無礼であると言われるだろう。でも見た目、身分に違わず接してくれたことが珍しくて素直に嬉しかった。

「ナタリアにそっくりな人を見たのよ」

「え、私にそっくり？」

首をかしげるナタリアに笑いかけながらエルミーラは再度、カップに口をつけた。

少しだけ冷めたお茶が喉を通る。

「……早くジーンに会えるといいわね」

「ありがとうございます。エルミーラ様もヴィルフリート様とゆっくり時間が取ればよいのですが」

そこでナタリアは口を閉ざす。

すでに使用人たちは部屋から出ており、会話が止んだことで室内は全くの静けさが訪れていた。

真面目な侍女であり、信のおける友人でもあるナタリアはエルミーラが話し出かけなければこのままの状態だろう。だがこの静けさも、今のエルミーラにとっては心地の良いものであった。

「静かなここも、似てるわ」

独り言のようなエルミーラの言葉に、ナタリアは返事をしない。特に返事を求めていなかったエルミーラはナタリアに向けていた視線を下げる。

そしてまだカップに残るお茶を見つめ、なにかを思い出すように

頬を緩めた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6428s/>

孤児院のナテア

2012年1月12日22時17分発行